

# 近代博多における個別町社会構造と祇園山笠経営

宇野功一

昭和一〇年代の西町流古溪町を例に

The Social Structure and the Gion-Yamakasa Management of a Chou in Hakata During the Modern Period : The Case of Kokei-machi

- ① 本稿の目的
- ② 近代博多の個別町の組織
- ③ 昭和一〇年以前の古溪町の概要
- ④ 昭和一〇年の古溪町
- ⑤ 戦時体制下の古溪町
- ⑥ 聞き取り調査からみた昭和前期の古溪町
- ⑦ 昭和一八年の古溪町の祇園山笠経営
- ⑧ 要約

## 【論文要旨】

近代の博多において、大祭祇園山笠に参加できた諸町のうち、古溪町という町の社会構造と祇園山笠経営についてその実態を詳細に叙述した。同町にはとりわけ昭和一〇年代の史料が豊富に残っているため、聞き取り調査で得られた情報も交えつつ、とくにこの時期を中心に叙述した。

古溪町では道路に面した表店に居住する世帯とそれ以外の場所（裏店または表店内の借間）に居住する準世帯との間に大きな社会的格差があった。町の寄合や町役員の選挙に参加できるのは表店の世帯主だけであった。また、町費・祭礼当番費・衛生費などを負担するのも表店の世帯主だけであった。彼らだけが町の正式な構成員であったとみなせる。

日中戦争が長期化するなか、古溪町では昭和一五（一九四〇）年に町内会と隣組が設立された。そのさい、内務省の方針に従い準世帯も両組織に加えられたが、しかし

両組織の役員の選挙に準世帯の世帯主は参加できなかった。

表店の優越は昭和一八（一九四三）年の祇園山笠において古溪町が山笠当番という役を勤めたときにも明瞭に示された。このときの同町の当番役員は表店の世帯主またはその子弟だけで占められた。さらにこの祭礼で最も名誉があるとされる「台上がり」と呼ばれる役割を勤めたのも、表店の世帯主またはその子弟だけであった。

一方、明治末期以降の日本では慢性的な不況が続き、博多においても町々の経済力は低下していき、祇園山笠の実施も困難になっていった。昭和前期（一九二六～一九四五）になると、博多の町々は福岡市や地元財界から祇園山笠にたいする補助金を交付してもらうようになった。しかし太平洋戦争の激化によって物資と人手に不足が生じ、祇園山笠の実施はさらに困難になった。古溪町が山笠当番を勤めたのはまさにこのような時であった。

## ① 本稿の目的

博多祇園山笠（以下、祇園山笠という）は七月一日から一五日まで男性のみの参加でおこなわれる福岡市博多区の大祭で、博多の総鎮守櫛田神社に氏子たちが「山笠」と呼ばれる作り山と能を奉納するものである。正確には櫛田神社の相殿である祇園社（＝須賀社）に奉納する。江戸時代の祭礼期間は旧暦六月一日から一五日までであった。明治時代に入ると何度か新暦の六月または七月におこなわれ、明治四四（一九一一年）年に最終的に新暦七月実施と決定され、この年から現在の日程となった。

祇園山笠は、「流」と呼ばれる近隣の一〇前後の町から成る町組によって運営される（図1）。江戸時代から昭和前期まで、この祭礼に正式参加できる流は七つに固定されていた。東町流・呉服町流・西町流・土居町流・洲崎町流（別名、大黒流）・魚町流（同、福神流）・石堂町流（同、恵比須流）である。

このうち六つの流が最終日の早朝に山笠を一本ずつ櫛田神社に昇き入れて奉納し、それからすぐに同社からこれを出し、博多市街の約五キロの所定の順路で昇き進ませた。

「昇く」とは、棒などを肩に担いで移動することをいう。山笠には車輪がなく、六本の長い昇き棒（山笠棒）を山笠台という木組みの立方体の前後に通して縄で縛って建設される。この棒を大勢の人間で担いで山笠を動かす。これを「山笠き」という。明治中期までは山笠台の上に四本の柱を脚立状に組み、そこに人形を始めとするたくさんの豪華な飾り物を取り付けていた。この飾り物は、室町時代以来の慣例と思われるが、各山笠とも毎年作り替えられた。

山笠きは祭礼期間中に何度かなされ、それぞれ名称があるが、最終日早朝の山笠きは「追い山」と呼ばれる。そのうち櫛田神社への奉納の部

分はとくに「櫛田入り」と呼ばれる。「追い山」という名称は、先行の山笠が逃げ、後続の山笠がこれを追うという、この山笠きのタイムレース的な様相に由来する。追い山のさいの山笠の出発順、すなわち櫛田入りの順番を「山笠番付」といい、毎年一定のやり方で替わっていた。

残る一つの流は最終日に、六本の山笠が櫛田入りを済ませた直後に櫛田神社境内で能を奉納した。能奉納の担当流は毎年交替したので、七年で七流を一巡した。その順番は前述の七流の表記順と同じである。

追い山以外の山笠きとしては、流昇き・朝山・他流昇き・追い山馴らし（別名、馴らし昇き）の四つがある。

このうち前三者は六山笠が会しておこなわれるものではなく各流が単独でおこなうもので、また各流とも毎年その順路を変える。流昇きは流内全町を廻るもの。朝山も同様であるが、早朝におこなわれ、各町長老やこの一年の間に亡くなった各町有力者の遺族へ敬意を表するもの。他流昇きは他流を広く廻って自流の山笠の披露目をするもの。

一方、追山馴らしは明治一六（一八八三）年に始まったもので、追い山の予行演習である。追い山と同じ順路を進んでいくが、終着点は追い山の約一キロ手前である。

山笠きには、山笠棒の前部と後部に付く「昇き手」および山笠棒の後端を最前列としてこれをスクラム状に押す多数の「後押し」が存在する。そして一トンほどもある山笠の速さを維持するために、両役割ともその人間を次々と交代させる必要がある。とりわけ追い山では他流の山笠に追い抜かれなければならないようにするため、より多くの人間が必要とされる。そのため一八世紀前期から今日に至るまで、山笠当番町では博多内にありながら祇園山笠に正式参加できない諸町（七流以外の流の構成町）や周辺村落から大勢の加勢人を雇い入っていた。

山笠奉納の実施にあたっては、七流とも当番町制度を採っていた。これを山笠当番という。山笠当番は一町で勤められる（単当番）か、ま

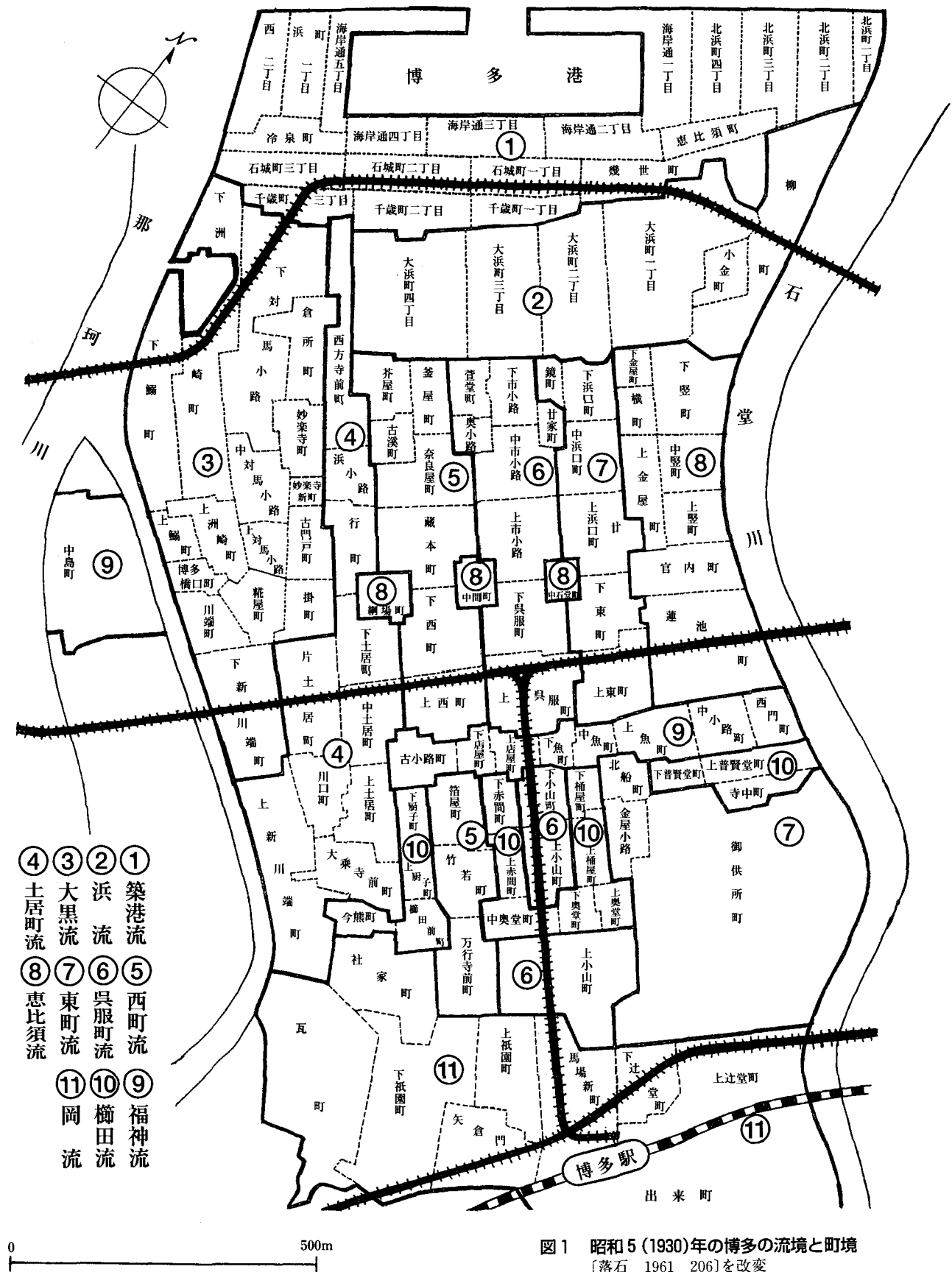


図1 昭和5(1930)年の博多の流境と町境

[落石 1961 206]を改変

※鉄道と市内路面電車軌道も表記。

※築港流以外は終戦時までほとんど変化はない。

※註(1)と註(10)も参照のこと。

たは隣接する二ないし三町合同で勤められ（催合当番）<sup>もやい</sup>ていたが、いずれの場合も当番は一年交替で、当番町が山笠奉納を指揮していた。催合当番の場合、中心となる町を本当番、これを手伝う町を半当番という。能奉納の実施にあたっては、七流とも右に準じた当番町制度を採っていた。こちらは能当番という。

なお明治三八（一九〇五）年の追い山馴らしのさい、同年の二番山笠担当の魚町流が他の五つの山笠担当流と激しい紛議を引き起こしたうえ、追い山への参加を拒否し、翌年から山笠も建てなくなった。そのためしばらく山笠が五本しか奉納されないという異常事態が続いた。明治四二（一九〇九）年は魚町流が能奉納を担当する年だったので山笠は六本奉納されたが、このとき魚町流は能の奉納もおこなわなかった。そのち大正二（一九一三）年の祭礼開始をまえに、同年以降は魚町流は能奉納専任となつて山笠は建てないという条件に魚町流と他の六流が同意し、魚町流は祇園山笠へ復帰した。<sup>（2）</sup>換言すれば他の六流はこれ以後、山笠奉納のみをおこない能奉納にはかわらなくなった。

さて、とりわけ山笠当番のほうは飾り物の作成や加勢人の雇用のために莫大な費用を要する。そのため町々では次に回って来る当番年の数年前からその費用を少しずつ貯蓄していた。このように町単位で多額の金を集める場合、そこにはその時々町の社会構造が反映するであろう。

このような見通しのもとで筆者は以前、一九世紀中期の土居町流の二つの町（行町<sup>ぎょうのちやう</sup>と片土居町<sup>かたどいまち</sup>）を例に、祇園山笠の経済基盤と運営基盤を検討した〔宇野 二〇〇五〕。

経済基盤とは町内で山笠当番費用がどのように徴収されていたのかということであり、運営基盤とは町内で山笠当番運営に参加できたのがどのような人であったのかということである。また、山笠当番の費用負担者層と運営者層との間にはどのような関係があったのかも検討した。

本稿は右の拙稿の延長線上に位置づけられる論文で、祇園山笠に参加

する個々の町における近代（明治時代から終戦まで）の経済基盤と運営基盤の実例の一つとして、西町流に属する古溪町（古溪町とも書く）<sup>こけいまち</sup>の姿を提示する。なお、以下では費用負担と当番時の諸行動の運営とを一括して表現する場合は「祇園山笠経営」という。

古溪町を調査対象に選んだ理由は、同町には「西頭資料」<sup>（3）</sup>と総称される近代史料が豊富に伝来しており、町の社会構造や祇園山笠経営にかんして多くのことが知られるからである。とりわけ昭和一〇年代には町組織の実態や祇園山笠経営にかんする詳しい史料が多く書かれ、町の機能と構造についてかなりの程度明確に全体像を描くことができる。

そこで町の社会構造や祇園山笠経営について聞き取り調査で得られた情報も交えつつ、昭和一〇年代を中心に描写していくことにする。

ところで近代における博多諸町の様相と祇園山笠経営については地理学者の遠城明雄<sup>おんぎょう</sup>による論文があり、次のように記されている。文中の「山笠」は作り山のことではなく、祭礼名の「祇園山笠」を指している。

町は規模の面で相違があつたにもかかわらず、日常生活の基盤として機能していた。町で必要とされる諸費用は、各家の名前と収める金額が書かれた板をもった町総代や会計係が毎日徴収した日切り銭によつて賄われ、山笠の資金や町内の困窮者の救済としても利用された。この金額は町の集まりで決められたが、この取り決めによつて町内の階層性が日々確認されると同時に、豊かな家に対しては多く出費するのが当然であるという期待が形成されると考えられる。山笠などの資金を得るために、町内の空家を有力者で管理し貸家とすることもあつたという。冠婚葬祭の諸行事でも居住者同士は協力関係にあり、手伝いが足りている場合でも、町内の手伝いを受けることが慣例となつていた町もある。〔中略〕町は山笠の場合に行政と対立する側面を持っていたが、町総代や衛生組合長が両者を

繋ぐものとして制定され、さらに納税組合を兼ねるなど、町内の結びつきは行政支配の末端にも組み込まれており、その性格は両義的なものであったといえる。

〔遠城 一九九二 二七―二八〕

いくつか補足しておく。近代（とくに明治時代）の博多では行政による社会事業や福祉事業が充実しておらず、町内の保全などに要する各種の共同事業のほとんどは江戸時代と同じく町が独自におこなわなければならなかった。そのための費用が「町で必要とされる諸費用」で、町内各家から集められた。

これらの費用のほか、明治時代に各町で組織された納税組合によって町ごとに税金も集められ、共同納入されていた。町単位での税金の徴収と納入も江戸時代からのやり方に類似したものとみなせる。

また、祇園山笠は明治時代に三度、行政（福岡県や福岡警察署）によって山舁きの実施を禁じられ、町々はこれに抵抗した。町が祇園山笠のさいに行政と対立する側面をもっていたというのはこの件を指す。

禁止の具体的な理由はそれぞれの時期で異なるが、祇園山笠は旧弊であり社会の近代化または都市の近代化にそぐわないという認識が行政側には常にあった（宇野 一九九八）。山舁きの禁止こそされなかったが、大正時代から昭和前期にかけてもしばしば祇園山笠の廃止が議論された。遠城はまた、町内の裏長屋、すなわち長屋形式の裏貸家の居住者および奉公人について次のように述べている。文中の「山笠への参加」は「山舁きへの参加」という意味である。

ある町の「裏長屋」の場合、その居住者に対しては日切り銭の負担がなされなかったり、町の集まりに呼ばれないなど正式な町の構成員として認知されていなかったが、山笠への参加は認められていた。これに対して別の町では「裏長屋」の居住者はそれ以外の居住者と

なんら区別なく「中略」、また奉公人についても、山笠への参加が概ね認められており積極的に参加する人間は普段の働きもいという評価がされている。

〔遠城 一九九二 二八〕

遠城の記述はその副題に「一九一〇―一九三〇年代の福岡市博多部」とあるとおり、近代の博多諸町と祇園山笠経営にかんする最大公約的な説明となっており、筆者も大筋では妥当な記述と認める。

しかしこれは逆にいえば特定の町にかんする詳細を提示したものではなく、ある町が総体としてどのような機能と構造をもち、どのように祇園山笠を経営していたのかは明らかにされていない。そこで遠城の記述も参考にしつつ、この点について古溪町を対象に可能なかぎり詳細に提示することを本稿の目的とする。

また遠城の記述は実際には一九一〇年代と二〇年代を対象としており、三〇年代の話にはほとんど触れられていない。そのため、昭和一二（一九三七）年に始まった日中戦争の長期化にともなう戦時体制の強化などが個々の町にどのような影響を与えたか（または与えなかったか）、といった話は抜け落ちていく。この点にも注意しつつ記述を進めていく。

## ② 近代博多の個別町の組織

近代博多の個別町の組織について述べる。各町にはほぼ例外なく町総代と町衛生委員（衛生組合長や衛生組長ともいう）が設置され、そのほか学務員（学校委員）・町会計・納税組合長（納税組長）も設置されているのが普通であった。古溪町にも以上の五つの役職は存在した。順にみていこう。

江戸時代の博多の個別町（幕末・明治初期には一〇〇町あった）では町ごとに年寄が一名と年寄助役が一名置かれ、さらに一〇戸ないし二〇戸

程度を一組として組ごとに一名の組頭取（組頭ともいう）が置かれていた。彼らは福岡藩の町政機構の末端として機能していた。年寄については、嘉永年中（一八四八～一八五三）から二名としてもよいことになった。これらの職はいずれも無給であったが、課税面では若干の優遇措置が取られていた。彼らの主要業務の一つは各種の税金を徴収して上納することであった（山崎編 一九七三（一八九〇） 下巻五六～五八）。

なお福岡諸町では、年寄はもともと町ごとに二名置かれていたのが普通だったという（福岡市役所編 一八九一 五）。

廃藩置県後の地方制度の変転にともない、博多諸町と福岡諸町の町組織もしばしば変転した。

明治五（一八七二）年三月、年寄は副戸長と改称された。同年九月にはさらに保長と改称され、同時に組頭取は伍長と改称された。保長・伍長の選任法は各町の任意とされた。保長は各町一名が普通だったようである。明治二〇（一八八七）年三月には福岡区（おおむね藩政期の博多と福岡に相当）が「町総代設置準則」を定め、保長・伍長は廃されて町総代（旧村落部では村総代）・組総代が置かれた。しかしこのときの町総代はその職務内容が明確でなく、報酬または実費も区費の支出によらず町民の拠出によるという、甚だ不安定なものであった。組総代の報酬または実費についてははっきりしないが、上役である町総代より優遇されていたとは考えがたい（山崎編 一九七三（一八九〇） 下巻六〇～六二。福岡市役所編 一九五九 一七四～一七六）。

明治二二（一八八九）年四月に政府は市制および町村制を施行した。このとき福岡区も福岡市となった。これを受けて同年六月に市会で「区長設置法」が可決され、町総代を廃して区長を置くことにした。このときの区長制度は福岡市を二二区に分け（旧博多部は第一区から第九区に相当）、各区に区長およびその代理者を一名ずつ置き、市政の末端行政に当たらせ、市がその業務にたいして実費を支給するというものであつ

た。しかしこれは経費と実効の両面に問題があり、早くも翌二三（一八九〇）年五月の市会で廃止が決まった。そこで明治二四（一八九一）年六月、市会で「町総代設置準則及び心得概目」が可決され、町総代制度が再び法制化された。これと同時に「町衛生委員設置準則及び心得概目」も可決された（福岡市役所編 一九五九 一七六～一八〇）。

その条文は以下のとおりである。

#### 規則 第 号（明治二十四年六月市会）

##### 町総代設置準則及び心得概目

##### 総代設置

第一條 町総代は一町に一名若くは数名を置き、又は数町を合して一名を置く。

但し町衛生委員を兼ねることを得。

第二條 町総代は町内現住の戸主及び世帯主の協議により之を選挙す。但し其の任期を定むると否とは該町の適宜とす。

第三條 町総代に実費又は報酬等を支給すると否とは該町の協議に任す。

第四條 町総代の設置区域任期及び当選者の姓名は市長へ報告すべし。

##### 町総代心得概目

第五條 町内理事諸般の事項を斡旋すること。

第六條 町内戸籍の異動及び寄留者の出入、営業者の異動等の整理に注意すること

第七條 納税準備の方法を設け納期を<sup>あやま</sup>怠らざる様注意すること。

第八條 清潔法及び衛生上等に注意し常に町衛生委員と協議し衛生普及の方法を図ること。

第九條 道路橋梁の破損等に注意すること。

規則 第 号

町衛生委員設置準則及び心得概目

町衛生委員設置

第一條 町衛生委員は町総代設置区域により一名若くは数名を置くこと。

但し伝染病流行の兆あるときは臨時数名を増員することを得。尤も此の場合に於て組合内医員あれば成るべく之を加ふるを要す。

第二條 町衛生委員は町内現住の戸主及び世帯主の協議により之を選挙す。

第三條 町衛生委員に実費又は報酬等を支給すると否とは該町の協議に任す。

第四條 町衛生委員の任期及び当選者姓名は市長へ報告すべし。

町衛生委員心得概目

第五條 組合内衛生上諸般の事項を斡旋すること。

第六條 清潔法及び衛生上の事に注意すること。

第七條 組合内家屋内外の掃除及び下水路下水溜の浚渫等日常怠らざる様注意せしむること。

第八條 市の負担に属する下水溝の流通及び掃除夫の勤怠に関し、異見あるときは其の旨具申すること。

第九條 組合内の大掃除及び井戸浚の日取りを定め施行の後市役所に報告すること。

第十條 伝染病流行予防に関しては別に規程を設くべし。

〔同書 一八〇―一八一〕

町総代は納税の監督など、町内の諸般の事項を斡旋することとされ、

そのうち衛生面についてはまだ伝染病が頻発する時代であったため、とくに町衛生委員を設けてこれが町総代を助ける形となっている。町総代と町衛生委員は、旧福岡部についてはよくわからないが、旧博多部では一町に一名ずつの設置が一般的であった。

しかしこのときも両職にたいする実費・報酬は市費の支出によらず、各町の任意で支給の有無を決めることとされた。したがって両者は公職ではなく名誉職であった。法律または条例にもとづく強制的な執行力をもった行政機関でもなかった。また両者とも選挙法が具体的に規定されておらず各町の適宜とされ、任期も各町の適宜とされた。こういったわけとともに市への責任が明確ではなく、市からの監督も必ずしも充分ではなかった。

しかしそれでも全般的にみて、この両職が近代博多の各町において居住者の共同生活に果たした役割は大きかった。

町総代の具体的な活動について、明治三四（一九〇一）年三月一日付『九州日報』に、博多上東町居住の人物が「町総代論」という記事を載せている（同書 二一五―二一七所引）。

町総代の活動としては、不就学児童や困窮者への救助、祝事祭典の監督、非常凶変時の指揮、公共義捐金や神社仏閣への寄付金の徴収、町内金銭の管理、町間・流間の交渉、政府官庁の諭達訓令の伝達などが挙げられている。また、議員選挙のさいには自分の推す候補者に投票するよう町内の有権者に圧力をかけることが珍しくないとし、この点は非難されている。そして結論として、町総代の「権能と勢力は法律制文の以外に於て、優に町内の安寧秩序を左右するに足る」と記されている。

次に学務員について述べる。明治二〇（一八八七）年四月、福岡区内の四つの小学校区（旧博多部は三番と四番の小学校区に相当）を維持するための議会（学区会）の構成が改正され、各小学校区に含まれる町村ではそれぞれ一人ずつ学区会議員を選挙することになった。その結果、

三番小学校区からは五四人、四番小学校区からは四七人の議員が誕生した。<sup>(5)</sup>ところが議員数が多すぎたためかこれほどなく改正され、明治二三(一八九〇)年七月に至ってその改正された人数(三番・四番小学校区からそれぞれ一五人)にもとづいて各小学校区の全体で議員が選挙された〔同書 一二一六〕。

これによって町々が公的に小学校とかわることはなくなったわけだが、しかし昭和一〇(一九三五)年の古溪町には町役員のひとつとして学務員が存在していた。学務員は町内と小学校を繋ぐ役割を果たしていた。これは明治二〇(一八八七)年の町村ごとに選出された学区会議員の系譜を引くものと考えられる。

一方、町会計は江戸時代の町費徴収事務が発展して成立したものとみなせる。これは多くの町では明治時代に成立していたようである。しかし成立過程の詳細は不明で、古溪町についてもいつごろ設けられたものか不明である。

納税組合長は税金の徴収・納入事務を司る役職である。全国的にみれば、納税組合が各地で本格的に組織されるのは税金の滞納が増加した日露戦争以後の、明治末期から大正時代にかけてである。しかしたとえば古溪町の隣町である奈良屋町のように明治一二、三(一八七九、八〇)年ごろに納税組合が組織された町もあり〔九州日報〕一九一八年二月一日付)、旧博多部各町での納税組合の組織化は必ずしも日露戦争以後に始まったものではなかったようである。博多における納税組合の成立過程の詳細はやはり不明で、古溪町についてもよくわからない。

### ③ 昭和一〇年以前の古溪町の概要

古溪町の名は、安土桃山時代の京都の臨濟宗大徳寺の住持古溪宗陳(一五三二～一五九七)に由来する。彼は、理由は不明だが天正一六

(一五八八)年九月に豊臣秀吉によって博多に流され、大同庵という庵に住んだ。しかし早くも天正一七(一五八九)年七月には赦免され、翌年正月までには京都に戻っている。この大同庵の周辺がのちに古溪町となったという。一方、大同庵の跡地にはのちに報光寺という浄土宗の寺院が建てられたが、これは奈良屋番(奈良屋町の前名)に位置していた。<sup>(6)</sup>

江戸前期の古溪町は面積としては狭い町であったが博多湾に近く、そのため万治年間(一六五八～一六六〇)に魚町(中世には入海に面した町だったが、近世に入るころに入海が消滅した)の魚問屋たちは福岡藩の許可を得てここに移住し、以後、同町は一大魚問屋街として江戸時代から明治時代にかけて長く繁栄した〔竹内他編 一九九一 五七六〕。

とりわけ西浜屋はその筆頭で、博多八丁兵衛と称した江戸後期の当主である初代西頭徳蔵は豪者と善行・奇行で知られ、婿養子である二代目徳蔵を経て、三五郎(前名は三右衛門および三代目徳蔵)と徳五郎(前名は仁吉)の兄弟も豪商として知られた〔武野 二〇〇四〕。三五郎のあと、西浜屋は弥平、初次郎と続いた。ほかにも西頭一族は博多屋や相嶋屋(相島屋)といった魚問屋を経営していた(系図1)。

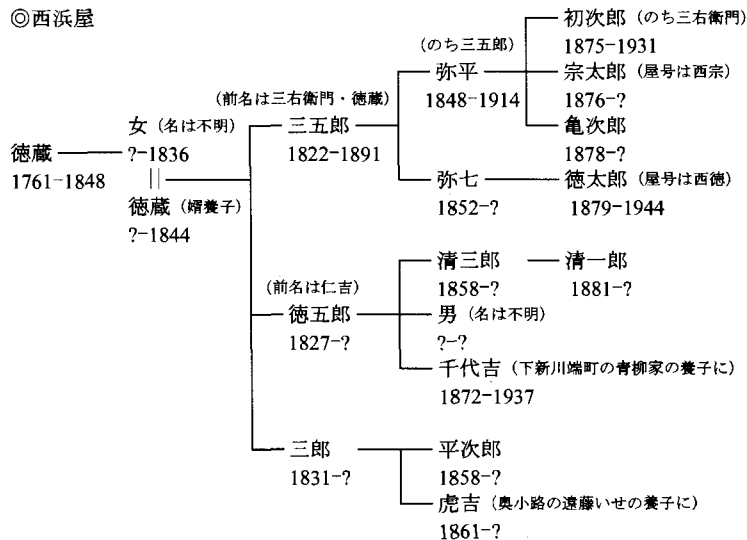
慶応元(一八六五)年冬に改定された博多九八町の運上銀(半年に一度、町単位で徴収された営業税)の賦課額では、同町は鯛町下の一万二三四六匁につぐ六八一六匁二分という高額を割り当てられており、博多屈指の富裕な町であった(表1)。同町の営業者はほとんどすべて相物・生魚問屋で占められていた(表2)。相物は塩魚、生魚は鮮魚である。なお鯛町下は古溪町以上の魚問屋街であった。

明治一二(一八七九)年一月一日の福岡区役所による調査では、古溪町は以下のような姿であった〔三原編 一九八〇(一八八〇) 三五〇〕。

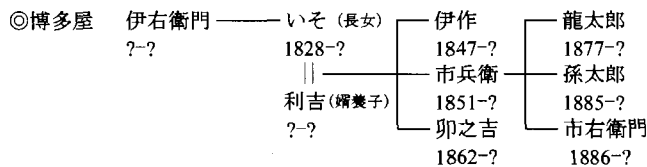
戸数は、本籍二二(士族三、平民一九)と寄留一(士族)で、合計二三戸。人口は、男性六〇(士族三、平民五七)と女性六四(士族五、平



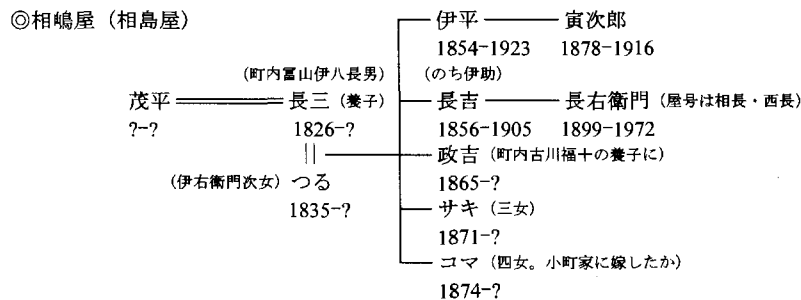
◎西浜屋



◎博多屋



◎相嶋屋 (相島屋)



系図1 西頭氏略系図

「戸籍」(「西頭資料」1)と福岡市博多区正定寺蔵の過去帳・位牌より作成

- ※「戸籍」は明治10年代に作成され同21(1888)年まで利用されたが、没年の記載はない。
- ※故西頭昭三氏は徳太郎の次男。
- ※西浜屋は初次郎の長男三太郎の代、昭和前期に廃業した。
- ※博多屋は市兵衛のあと(死後か)に西頭テフが経営者となっているが[長田編 1932 26]、この人物は「戸籍」に市兵衛の妻と記されているテヨウ(1857-?)のことであろうか。
- ※大正時代の相嶋屋は、相嶋屋のほか相長や相良とも称したが[今泉編 1919 24。長田編 1922 198。同編 1924 18]、伊平の死によって廃業した。

民五九)で、合計一二四人。営業は、商業一九戸。商業の具体的な内容は書かれていないが、ほとんど魚問屋だったと思われる。

同じ明治一二(一八七九)年の五月の古溪町は二四の番地から成っているの<sup>⑧</sup>で、このころには二四の番地に一二四人ほどが住んでいたことに

なる。

その後、明治四〇（一九〇七）年一〇月と明治四一（一九〇八）年四月に福岡市役所は町総代西頭三右衛門（初次郎か）にそれぞれ「古溪町現在戸数取調書 済」と「古溪町現在戸数取調書」という文書を渡した。<sup>9)</sup> いずれも古溪町の県税戸数割の資料である。両資料では番地数は二三となっており、明治末期までに屋敷が一筆減っていたことが知られる。番地数は終戦まで基本的には二三のままである（図2および表3）。

表3から、古溪町には遅くとも明治四〇（一九〇七）年には上下二組の納税組合が存在していたことがわかる。しかし前述のようにいつごろこれが設けられたのかは不明である。九番地から一七番地までが下組、それ以外が上組である。また、同表から明治末期の古溪町には裏店が少なくとも二戸あったこともわかる。たまたまこの時期には二戸とも空家であったが、空家でない場合には、その居住世帯にも福岡市は県税戸数割を課したはずである。なお古溪町出身の柴田睦夫氏の記憶では、昭和初期には七番地と八番地は下組の所属になっていたという。その後の昭和一〇年代に書かれたいくつかの「西頭資料」の分析によっても、七番地と八番地は下組の所属である。

さて、明治二三（一八八〇）年、古溪町と下鰯町（鰯町下の改称）の協力によって鮮魚共同競り場が下対馬小路（対馬小路町下の改称）に設けられた。<sup>10)</sup> これは明治二五（一八九二）年五月に博多魚市株式会社（旧魚市場という）となった。同社は当初、鮮魚問屋の集金業務を代行するだけであったが、徐々に業務を拡張して委託販売もするようになり、やがて乾魚も扱うようになった。これに対抗すべく明治三四（一九〇一）年七月、博多魚市株式会社との関係の薄い乾魚問屋たちは下対馬小路に株式会社博多魚市場（新魚市場という）を設立し、海産物全般の委託販売を開始した。明治三六（一九〇三）年になると下対馬小路の一部が千歳町三丁目<sup>11)</sup>に編入され、それにもない旧魚市場はそこに位置する形

になった。両社は昭和七（一九三二）年三月に合併して株式会社福岡魚市場となり、海岸通り五丁目に新しい営業所を構えた（竹内他編 一九九一 五七六、六七三、八七二。井上 一九八七 一七八―一七九）。

ところで、博多港の整備・拡張を目指して明治三二（一八九九）年に設立された博多築港株式会社は翌年五月に博多湾の埋立工事を開始し、明治四一（一九〇八）年一〇月に竣工した。千歳町・海岸通り・冷泉町<sup>12)</sup>などの町がこの工事の過程で誕生して築港流を形成するに至ったが、この工事によって古溪町は海岸から遠ざかることになり、地の利は失われた。対照的に古溪町より北に位置する下対馬小路と千歳町三丁目は両魚市場を起点に発展していった。

古溪町でおそらく昭和後期に書かれたある資料<sup>12)</sup>によると、明治四一（一九〇八）年ごろには同町の各魚問屋は店頭での競りを停止し、さらに大正九（一九二〇）年までには各魚問屋の本家が他町に移転したという。表2から表6までを眺めると、この伝承がおおむね妥当なものであることが確認できる。

まず表2と表3それぞれの屋号と姓を比べると、幕末の古溪町に存在していた老舗といえる魚問屋の多くは明治四〇（一九〇七）年までに姿を消しており、転出ないし廃業が進んでいたことがわかる。このとき古溪町に残っている老舗は博多屋・西浜屋・鐘崎屋・油屋・相嶋屋の五店だけである（厳密にいうと、鐘崎屋についてはこのとき魚問屋を続けていたのかどうか確認できなかった）。

一方、表4の大正九（一九二〇）年二月の段をみると、このときまでに西頭市兵衛経営の博多屋を除く四店も古溪町から転出していたことが確認できる。その博多屋は大正七（一九一八）年には古溪町で居住・営業していたが（今泉編 一九一九 二四）、大正八（一九一九）年または九（一九二〇）年に営業所のみを下対馬小路に移し（長田編 一九二二 一九八）、ついで大正一一（一九二二）年の一〇月一七日に五〇円

表1 慶応元(1865)年冬改の博多98町の運上銀賦課額

順位	町 名	所属流名	運上銀(単位:匁)	順位	町 名	所属流名	運上銀(単位:匁)
1	鯛町下	洲崎町流	1 2 3 4 6.0	50	北船町	東 町 流	5 8 4.6
2	古溪町	西 町 流	6 8 1 6.2	51	市小路町下	呉服町流	5 2 5.6
3	土居町上	土居町流	5 1 0 6.0	52	西方寺前町	土居町流	5 1 4.0
4	洲崎町中	洲崎町流	3 8 8 7.2	53	魚町上	魚 町 流	4 7 8.6
5	鯛町上	洲崎町流	3 7 1 8.0	54	小山町下	呉服町流	4 7 0.2
6	仲間町	石堂町流	3 1 7 2.6	55	妙楽寺町	洲崎町流	4 3 3.0
7	桃屋番	洲崎町流	2 3 5 3.6	56	土居町中	土居町流	4 2 4.0
8	対馬小路町中	洲崎町流	2 2 9 9.6	57	中小路町	魚 町 流	4 1 6.6
9	対馬小路町下	洲崎町流	2 1 5 5.6	58	辻堂町上	岡 流	3 8 7.8
10	西町上	西 町 流	2 1 3 4.0	59	金屋町上	石堂町流	3 7 5.0
11	藏本番	西 町 流	1 9 8 9.6	60	櫛田外町	厨子町流	3 6 4.6
12	中嶋町	魚 町 流	1 9 1 6.0	61	魚町中	魚 町 流	3 6 0.0
13	新川端町下	洲崎町流	1 7 1 4.0	62	店屋町下	魚 町 流	3 5 9.6
14	掛町	洲崎町流	1 5 4 7.0	63	市小路町中	呉服町流	3 2 3.8
15	川口町	土居町流	1 2 7 4.6	64	浜口町中	東 町 流	3 0 4.6
16	奈良屋番	西 町 流	1 2 7 1.6	65	万行寺前町	西 町 流	2 6 5.0
17	新川端町上	土居町流	1 2 3 0.6	66	大乘寺前町	土居町流	2 3 1.0
18	古小路町	魚 町 流	1 2 1 7.0	67	鏡町	東 町 流	2 1 8.0
19	川端町	洲崎町流	1 1 8 1.0	68	桶屋町下	厨子町流	1 9 5.6
20	浜口町上	東 町 流	1 1 7 1.6	69	社家町	岡 流	1 6 4.4
21	浜小路町	土居町流	1 1 3 4.0	70	古門戸町	洲崎町流	1 5 9.2
22	網場町	石堂町流	1 1 1 4.2	71	厨子町下	厨子町流	1 5 7.0
23	土居町下	土居町流	1 0 8 5.0	72	片土居町	土居町流	1 0 9.6
24	西町浜	浜 流	1 0 5 5.0	73	蓮池町	石堂町流	1 0 7.6
25	呉服町下	呉服町流	1 0 2 6.6	74	呉服町上	呉服町流	9 7.2
26	洲崎町上	洲崎町流	1 0 1 5.6	75	辻堂町下	岡 流	9 2.6
27	箔屋番	西 町 流	9 9 0.0	76	妙楽寺新町	洲崎町流	9 1.6
28	釜屋番	西 町 流	9 6 8.8	77	金屋丁横町	石堂町流	8 8.6
29	行町	土居町流	9 4 8.6	78	御供所町	東 町 流	8 1.0
30	中石堂町	石堂町流	9 1 4.8	79	豎町上	石堂町流	7 0.8
31	東町下	東 町 流	8 7 5.8	80	厨子町上	厨子町流	6 9.0
32	豎町下	石堂町流	8 4 3.0	81	今熊町	厨子町流	6 6.0
33	市小路町上	呉服町流	8 2 8.0	82	浜口町下	東 町 流	6 3.4
34	馬場新町	岡 流	8 0 3.2	83	奥堂町下	厨子町流	5 6.6
35	店屋町上	魚 町 流	8 0 3.0	84	奥堂町上	厨子町流	5 5.2
36	官内町	石堂町流	7 9 2.0	85	金屋小路町	東 町 流	5 3.6
37	橋口町	洲崎町流	7 7 9.0	86	西門町	魚 町 流	5 0.0
38	豎町浜	浜 流	7 5 9.8	87	廿家町	呉服町流	4 7.6
39	祇園町下	岡 流	7 5 3.6	88	茅堂町	呉服町流	3 8.0
40	瓦町	岡 流	7 4 3.2	〃	竹若番	西 町 流	3 8.0
41	西町下	西 町 流	7 4 1.2	90	普賢堂町上	厨子町流	3 7.0
42	東町上	東 町 流	7 2 5.6	91	対馬小路町上	洲崎町流	3 4.6
43	小山町上	呉服町流	7 2 2.2	92	赤間町下	厨子町流	3 4.0
44	魚町下	魚 町 流	7 1 5.6	93	芥屋町	西 町 流	3 3.6
〃	祇園町上	岡 流	7 1 5.6	94	桶屋町上	厨子町流	2 4.0
46	浜口町浜	浜 流	6 8 1.6	95	豎町中	石堂町流	1 9.0
47	奥小路町	西 町 流	6 5 5.2	96	普賢堂町下	厨子町流	1 6.0
48	奥堂町中	厨子町流	6 1 9.6	97	赤間町上	厨子町流	1 3.0
49	市小路町浜	浜 流	5 9 0.6	98	金屋町下	石堂町流	1 2.0

「店運上帳」(「簡田神社文書」843—1 から843—10)より作成  
 ※1匁は60銭。

表3 明治40(1907)年度の古溪町の県税戸数割負担者

番 地	納税 組合	明治 40 年度前期 県税戸数割負担者	明治 40 年度後期 県税戸数割負担者	魚問屋 の屋号
1	上	西頭市兵衛	西頭市兵衛	博多屋
2	上	西頭三五郎	西頭三五郎	西浜屋
3	上	古田熊次郎	古田熊次郎	
4	上	西頭惣太郎	西頭惣太郎	
5	上	尾崎ヤソ	尾崎ヤソ	
6	上	柴田福太郎	柴田福太郎	
7	上	田代吉作	松尾ツギ	
8	上	坂本森次郎	大隅藤太郎	
9	下	大石喜久	原田直三郎	
9ノ1		空家	空家	
10		空家	空家	
10ノ1	下	大須賀久次郎	大須賀久次郎	
11	下	竹若源兵衛	竹若源兵衛	鐘崎屋
12	下	安武長次郎	安武長次郎	
13	下	山田荒太郎	山田荒太郎	
14	下	大須賀三右衛門	大須賀三右衛門	油 屋
15	下	塩田新吾	塩田新吾	
16・17	下	西頭伊平	西頭伊平	相嶋屋
18	上	泉栄次郎	泉栄次郎	
19	上	磯野タキ	磯野タキ	
19ノ1		空家	空家	
20 [欠番]				
21	上	西頭弥七	西頭徳太郎	
22	上	西頭長吉	西頭サキ	
23	上	柴田鶴之助	柴田鶴之助	

「古溪町現在戸数取調書 済」「古溪町現在戸数取調書」  
 (「西頭資料」5、6)より作成  
 ※「古溪町現在戸数取調書 済」で「9ノ1」「19ノ1」とある番地は、  
 「古溪町現在戸数取調書」では「9ノ1裏」「19ノ1裏」とあり、裏店である。  
 ※魚問屋の屋号は表2の典拠と〔今泉編 1919 24〕による。  
 ※西頭惣太郎は正しくは西頭宗太郎。  
 ※西頭長吉はすでに死亡していたが、なぜか名が出ている。

表2 慶応元(1865)年冬改の古溪町の運上銀賦課額

屋 号	姓 名	営 業 内 容	運上銀(単位:匁)
博多屋	西頭伊右衛門	相物生魚問屋	180.0
西浜屋	西頭仁吉	相物生魚問屋	900.0
西浜屋	西頭三右衛門	相もの生魚問屋	1270.0
今津屋	内田八右衛門	相物生魚問屋	850.0
〃	〃	亭 店	10.0
〃	〃	塩 問 屋	60.0
〃	〃	わた弓老挺	10.0
玄海屋	又吉		
玄海屋	田村嘉六	相物生魚問屋	10.0
魚 屋	古田七兵衛	生 魚 店	6.0
油 屋	古川太吉	相物生魚問屋	180.0
志賀屋	岩崎善三	相もの生魚問屋	290.0
今津屋	内田三右衛門	志 荷	6.6
〃	〃	油 屋	20.0
〃	〃	からし油問屋	20.0
鐘崎屋	安武長次郎	相物生魚問屋	570.0
油 屋	大須賀喜平	相もの生魚問屋	880.0
相嶋屋	西頭惣吉	相もの生魚問屋	30.0
大嶋屋	市右衛門	相もの生魚問屋	370.0
相嶋屋	西頭長右衛門	相もの生魚問屋	320.0
今津屋	八右衛門出店		
湊 屋	篠崎吉右衛門	相物生魚問屋	310.0
	惣右衛門		
岐志屋	清兵衛	相もの生魚問屋	160.0
佐野屋	福次郎	相もの生魚問屋	10.0
	善助	志荷商人宿屋	3.6
海老屋	海老崎利平	旅 人 宿	5.0
〃	〃	代呂物問屋	50.0
〃	〃	相物生魚問屋	290.0
小 計	22人		6811.2
欄外記載	善兵衛	か み 結	5.0
総 計	23人		6816.2

「店運上帳 西町流」(「櫛田神社文書」843—5)、「戸籍」  
 (「西頭資料」1)より作成  
 ※1匁は60銭。

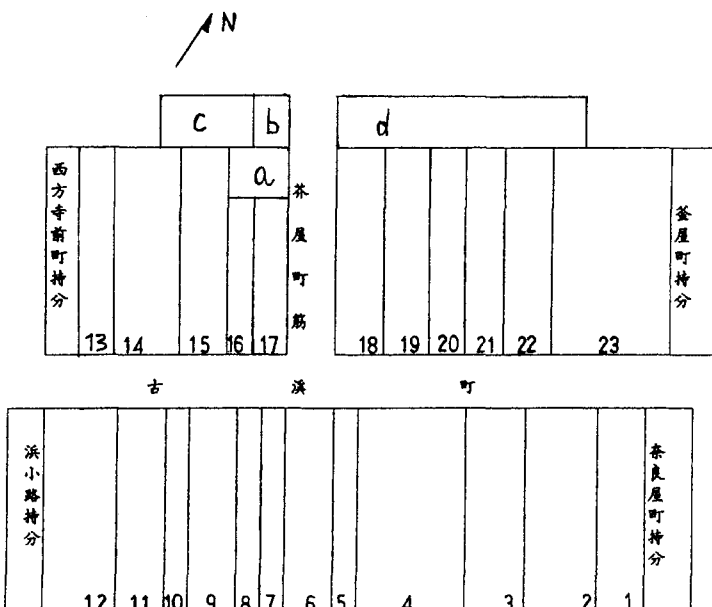


図2 明治40(1907)年から昭和20(1945)年までの古溪町概念図

「(仮)古溪町関係書類綴」(「西頭資料」19)を改変  
 ※数字は番地であるが、枝番号についてはほとんど把握できなかったため、表記していない。  
 ※a、b、c、dは昭和10年代に確認される番地だが、番号が不明なのでアルファベットで仮称。bは18の皮革問屋の倉庫だが、ひとまず表記した。

の送別費を古溪町に寄附して居室も引き払って転出した。<sup>(13)</sup>ここに、老舗の魚問屋はすべて転出ないし廃業した。

その後の古溪町の姿を同表の大正一二（一九二三）年度の段から探ると、このときには多様な営業者が存在しており、町としての一定の営業傾向は見出せなくなっている。この段から魚問屋であることが確認できるのは、西浜屋の分家の西頭宗太郎（屋号は西宗）だけである。

表5は、大正一二（一九二三）年における、鐘崎屋を除く老舗四店の新しい営業所の所在地などを記したものである。いずれも古溪町から博多湾近くの町に営業所を移している。つまり新旧の魚市場に近い場所である。各業者の居室の所在地はいずれも不明であるが、表4でみたとおり、彼らがすでに古溪町に居住していなかったことは確実である。

表6は大正中期から昭和前期にかけての古溪町の主要営業者（年に二〇円以上の営業税または一五円以上の営業収益税を納めた者）を示したものである。四番地所在の西頭宗太郎が大正一二（一九二三）年度の段に出ているのを最後に、魚問屋の記載はなくなっている。古溪町では魚問屋の経営が難しくなっていたことが、この表からも確認できる。

また、この表の典拠自体に営業者の全員が挙げられているわけではないので町全体の経済力を精確に窺うことは不可能であるが、しかし二〇円未満の営業税または一五円未満の営業収益税しか課せられていない小規模経営の営業者が多かったということはいえる。

以上みてきたとおり、明治末期から大正時代にかけての古溪町ではかつての魚問屋街という町の性格とそれがもたらしていた富とが失われ、経済的にも小町となっていた。

表7は昭和四（一九二九）年四月の古溪町居住の有権者（すなわち二五歳以上の全男子）の一覧である。該当者は四二名を数える。同一番地に複数の姓の者が居住している例が散見されるが、これはその番地に表店が二戸あったか、表店に住み込みの店員・奉公人または借間人がいた

か、裏店があつて借家人がいたか、いずれの場合であろう。

ところで、表6の昭和六（一九三一）年度の段には四番地の営業者として幾度虎一（または虎一）と片桐亀吉という人物が出てくる。つまりこのときまでに西頭宗太郎が転出していたことが知られる。そして年次の特定はできないが、その転出後のある時期からこの番地には二戸の店舗が存在するようになったということになる。表7の四番地には幾度虎一の名前しか出ていないので、おそらく片桐亀吉の店舗は昭和四（一九二九）年四月以降に建てられたものであろう。聞き取り調査によると、両店舗はともに表店であつたという。同一番地に二戸の表店が立っていた、やや珍しい例である。以下、本稿では便宜的に、幾度の表店を四番地東、片桐の表店を四番地西とする。

ここで、大正一四（一九二五）年に古溪町が山笠本当番を勤めた（古溪町は芥屋町と催合で、交互に本当番と半当番を勤めていた）さいの山笠役員についても示しておく。<sup>(14)</sup>

町総代	泉 栄次郎
取締	高橋松次郎
	原田直三郎
役員	島田次三郎
	川野 吉平
	西頭徳太郎
衛生	塩田 数吉

ここでの「取締」は「山笠取締役」の略称で、「山笠取締」ともいう。<sup>(15)</sup>「役員」は狭義の「山笠役員」の意で、「山笠委員」ともいう。山笠取締と山笠委員は祇園山笠経営専任の役員である。それにたいして町総代と衛生組長は町役員としてそのまま祇園山笠関係の役員を兼任している。

昭和 9 (1934) 年度、営業収益税納額 15 円以上の営業者				
1	篠原トメ	席貸業	雲 井	42.00
14	吉積健二	薪炭・丸炭団・氷の卸売と小売		45.00
18	泉栄次郎	皮革・靴・鞣原料の卸売		29.00
23	合資会社	料理屋業・仕出業	かね吉	85.00
昭和 14 (1939) 年度、営業収益税納額 15 円以上の営業者				
1	篠原トメ	席貸業	雲 井	45.00
12	岡本三郎	醸造用器具・空樽の卸売と小売		23.00
14	吉積健二	薪炭・丸炭団・氷の製造と卸売と小売	丸 吉	66.00
18	泉栄次郎	皮革・靴・鞣原料の卸売		33.00
19	瀬戸寛二	金物・機械工具の卸売と小売		146.00
23	合資会社	料理屋業	かね吉	114.00

[今泉編 1919。長田編 1922。同編 1924。同編 1927。  
同編 1932。同編 1935。吉富編 1940] より作成

表 7 昭和 4 (1929) 年 4 月の古溪町居住の有権者

番 地	姓 名
1	
2	秋山房吉、秋山利雄、秋山謙次郎
3	中島嘉八郎
4	幾度虎一
5	尾崎幸祐
6	柴田喜助、居石繁太郎 (柴田方)、岩崎磯松、山浦伊太郎
7	
8	
9	淀川豊次郎
10	高橋松次郎、重松彦三郎 (高橋方)
11	
12	尾道常吉、尾道孝一、尾道文七
13	船津健次
14	田村正三郎、梅田友次郎、松永啓一、松永茂平次、 深堀喜安 (松永啓一方)、松尾初次郎、松尾松次郎
15	塩田数吉、塩田新吾
16	緒方惟吉、高橋光次、川崎正一 (高橋光次方)、屋田修
17	安川次右衛門
18	泉栄次郎
19	河本八十八、野坂渉、森部藤太郎
19ノ3	本田眞二
20	
21	西頭徳太郎
22	西頭長右衛門、永島久市
23	川野亀次郎、川野又助、川野次吉

[福岡市役所編 (推定) 1929 (推定) 88~89] より作成

表 3・4・6・7 には、右の七人のうち川野吉平を除いた六人の名前がしばしば出ている。この六人はいずれも明治末期から昭和初期にかけての表店の世帯主であった。川野吉平は二三番地の料理屋かね吉の経営者である川野亀次郎の家族であるが、続柄は確認できなかった。

表4 大正時代の古溪町の世帯主

	大正9年2月	大正12年度	
番地	姓 名	姓 名	営業内容
1	西頭市兵衛	若江信親	歯科医
2	井上孫次郎	秋山房吉	金物商
〃	庄司ヒテ	藤島貞治	薪炭商
3	古田伝七	鬼木忠平	古物商
4	西頭宗太郎	西頭宗太郎	海産物商
5	尾崎熊雄	尾崎熊雄	理髪業
6	柴田福次郎	柴田平次郎	豆腐屋
7	岡崎代三郎	高橋仙太郎	飲食店
8	牛尾熊吉	牛尾ナヲ	果物商
9	原田直三郎	原田直三郎	料理店
10	高橋松太郎	高橋松次郎	大工職
11	島田次助	島田次三郎	塗物師
12	宮本源三郎		
13	栗原作太郎		
14	浦崎千造	浦崎千代藏	生鶏商
15	塩田新吾		
16	城野徳二郎	城野吉右衛門	履物商
〃 ?	古森タケ		
17 ?	小町コマ		
18	泉栄次郎		
19	松永宗一郎		
20			
21	西頭徳太郎		
〃 ?	近松ノフ		
22	西頭長右衛門		
23	川野亀次郎	川野亀次郎	料理店

「大正九年二月ヨリ 電燈料集金帳」(「西頭資料」9)、  
 [岡本 1924 273.長田編 1924 随所]より作成  
 ※大正12(1923)年度は不明な事項がやや多い。  
 ※表6から考えると、浦崎千造は浦崎千代藏の誤記かと思われる。

表5 明治40(1907)年末から大正11(1922)年末までに古溪町から転出した老舗魚問屋および彼らの大正12(1923)年度の営業税

旧宅番地	新営業所所在地	姓 名	商号・屋号	営業税 (単位:円)
1	下対馬小路46	西頭市兵衛	博多屋	67.00
2	冷泉町7	西頭三右衛門	西浜屋	36.00
14	下対馬小路46	大須賀頼造	油 屋	58.00
16・17	下対馬小路46	西頭伊平	相良[相嶋屋]	24.00

[長田編 1924 13~18]より作成

※旧宅番地は表3による。

表6 大正中期から昭和前期にかけての古溪町の主要営業者

番地	営業者名等	営 業 内 容	商号・ 屋号	営業税等 (単位:円)
大正7(1918)年度、営業税納額20円以上の営業者				
1	西頭市兵衛	魚問屋業	博多屋	67.41
4	西頭宗太郎	魚類の卸売と小売	西宗商店	38.95
9	原田直三郎	料理店業	満財屋	30.08
12	栗原作太郎	魚類[売別無記]		33.04
14	浦崎千代藏	生鶏[売別無記]		27.77
無記	合名会社	履物の小売	城野商店	53.90
大正9(1920)年度、営業税納額20円以上の営業者				
2	井上孫四郎	石炭(無煙炭)の小売	富久屋	21.80
4	西頭宗太郎	魚類の委託販売	西 宗	68.20
9	原田直三郎	料理屋業	萬財家	60.40
11	島田治助	塗師		23.52
12	宮本源三郎	洋品雑貨の卸売と小売		35.88
13	栗原恒三郎	砂糖・餡・穀等の卸売と小売		69.44
14	浦崎千代藏	生鶏の卸売		59.85
16	城野吉右衛門	履物・足袋の卸売		56.12
18	泉栄次郎	皮革(製靴原料)の卸売と小売	泉商店	37.00
19	松永宗一郎	和洋家具の製造と小売		20.28
大正12(1923)年度、営業税納額20円以上の営業者				
4	西頭宗太郎	魚問屋(海産物委託販売)	西 宗	54.00
無記	原田直三郎	料理屋業	萬財家	67.00
14	浦崎千代藏	生鶏の卸売	浦 崎	44.00
16	城野吉右衛門	履物・足袋の卸売と小売		24.00
無記	川野亀次郎	料理屋業	金 吉	298.00
大正15(1926)年度、営業税納額20円以上の営業者				
18	泉栄次郎	皮革・靴原料の卸売		47.00
無記	川野亀次郎	料理屋業	カネ吉	325.00
昭和6(1931)年度、営業収益税納額15円以上の営業者				
2	秋山謙次郎	鉄工・建築用真鍮・鉄鋼等の製作		26.00
4	幾度虎一	畳の製造と小売		17.00
4	片桐亀吉	蒲鉾の製造と卸売と小売		16.00
12	尾道孝一	菓子の製造と卸売と小売		46.00
13	船津健次	土木建築請負業		15.00
14	吉積健二	薪炭の卸売と小売		16.00
18	泉栄次郎	皮革・靴・鞣原料の卸売		36.00
無記	合資会社	料理屋業・仕出業	かね吉	52.00

#### ④ 昭和一〇年の古溪町

本章では、「昭和拾年第七月吉辰 町規約及ビ別途積立規約<sup>(16)</sup>」という記録を中心に議論を進める。この記録は昭和一〇（一九三五）年七月に起筆され、昭和一六（一九四一）年一月まで書き継がれており、「町規約」「日切計算」「古溪町別途積立規約」「改正別途積立金」「昭和拾五年十月十五日須賀神社御神幸」という五つの記事から成っている。この順にみていくことにしよう。

##### 一節 町組織と社会構造

まず、「町規約」である。その内容の多くは既存の町運営の慣例を明文化したものと考えられる。これは次のように始まる。

##### 町規約

###### 主旨

- （第一條）  
一、本町ハ町自治ノ円満ナル發展ヲ期シ併セテ居住者ノ福利増進ヲ目的トスルタメ町規約ヲ設ケル所以ナリ

以下、二二条まで規約があるが、便宜上三つに分けて紹介する。まず、町組織（町役員）のあり方と町の行動にかんする諸条が次のようにある。

###### （第二條）

一、本町ハ町総代一名町会計町役員 名ヲ設ク

###### （第三條）

一、町総代町会計町委員ハ町費負担ノ居住者ニ於テ選挙投票ヲ行

フモノトス

###### （第四條）

一、投票ハ全町居住者（世帯主）ノ過半数ヲ要ス  
衛生組長納税組合長学務員ハ町役員ノ互選トス

###### （第五條）

一、本町各役員ノ任期ヲ満ニケ年トシ補欠当選者ハ前任者ノ残務

期間トス

###### （第六條）

一、本町総代ニシテ退任者ハ元老<sup>老</sup>トシテ相談役ニ推選ス

###### （第七條）

一、本町居住者ハ本規約及決議事項ヲ遵守スルモノトス

###### （第八條）

一、本町町総代及役員ニシテ永年功績アルモノハ表彰シ別ニ記念

品ヲ贈呈ス

###### （第九條）

一、本町ノ行動ハ町委員ノ決議ニヨリ実行シ絶対第三者ノ干涉ヲ

###### （第十條）

許サザルモノトス

一、本町居住者及ビ家主ハ町規約ヲ厳守スルハ勿論ナルモ尤シ規約

改廃スル時ハ本町居住者ノ三分ノ二以上ノ承諾アラザレバ実

行スル事ヲ不得

###### （第十一條）

一、各項不備ノ事ハ町慣例ニヨリ実行スル事

昭和一〇（一九三五）年当時のこの町では、町総代一名と町会計、およびそれ以外の狭義の町役員（町委員）が設けられている。町会計と町委員の人数については明記されていない。これら三種の町役員には「町費負担ノ居住者」による選挙で過半数の票を得て当選するとされている。

つまり町内には町費を負担している居住者と負担していない居住者とがいたわけで、前者は「全町居住者（世帯主）」または「本町居住者」と称されている。彼らのみが町の正式な構成員とみなされていたことがわかる。そして彼らのみが町役員の選挙権をもっており、この点からみて、被選挙権をもっていたのも彼らだけであつたと考えられる。さらに彼らは町規約の改廃にたいする投票権ももっていた。

また、衛生組長・納税組合長・学務員（以上が町委員に当たる）については直接選挙ではなく、右の選挙で選ばれた町役員が自分たちのなかから互選するとされている。



次に金銭の常時徴収とその管理にかんする諸条を紹介する。

(第七条)

一、本町会計決算ハ毎年十二月末日ヲ以テ締切り翌年一月中ニ報告スルモノトス

(第八条)

一、日切計算期ハ毎年七月末日ト十二月末日トス

(第九条)

一、町総代及ビ町会計ハ積立金ノ保管及ビ町費ノ金銭出納ノ責任シ各委員ハ本規約慣例ニヨリ其ノ職務ヲ共ニ処理スルモノトス

(第十二条)

一、一戸ヲ構ヘタル現住者ハ町費負担積立金ハ勿論税金電燈料給水料ハ共同納入ノ義務アルモノトス

但シ離町者ハ総テ権利放棄スルモノトス

(第十四条)

一、本町居住者ハ衛生組合ニ加入シ各月十銭ヲ衛生費用ニ充当スルタメ積立ル義務アルモノトス

但シ決算ハ翌年一月中ニ報告スルモノトス

(第十五条)

一、本町居住者及ビ家主ハ別途積立ノ義務ヲ有ス事但シ別途積金規約ヲ遵守スル事

(第十八条)

本町ニ於テ行ヒツ、アル日切掛金ハ町費税金給水費電燈料合セテ日割以上ノ金額ヲ以テ掛込シ町ニ迷惑ヲ掛ケザル事  
万一滞納ノ懼レアルモノハ五日以内ニ町役員ニ申出ル事

第一二条の「一戸ヲ構ヘタル現住者」とは、第三条にいう「町費負担ノ居住者」の言い換えの一つである。後掲になるが、第一条に「本町転住一戸ヲ構ヘタル者」という語がみえる。これを受けて第一二条で、現在すでに本町で一戸を構えて居住している者、という言い換えがなされたわけである。彼らは町費を負担し、積立金を納めるのはもちろん、税金・電燈料・給水料については共同納入の義務を負う。

「二戸ヲ構ヘタル」ことが町の正式な構成員＝本町居住者となる資格

だったことがわかったが、このありふれた語は古溪町では正確なところという意味をもっていたのだろうか。聞き取り調査によると、これは道路に面した表店での居住を意味していた。表店の世帯主だけが町の正式な構成員であり、町にたいして種々の金銭負担の義務を負っていたのである。

町費と積立金、それに税金・電燈料・給水料の都合五つの負担についてまとめてみよう。

町費とは、祭礼当番以外の町内のさまざまな共同事業を町が独自におこなうための費用である。積立金とは、このあと三節で詳しくみるように二つの祭礼当番の運営費用である。一つは祇園山笠のさいの山笠本当番で、もう一つは松囃子という祭礼のさいの稚児当番である。

町費と積立金は町の意志によつて徴収・支出されるもので、町総代と町会計がその出納に責任をもつと記されている。また積立金については別途に規約を設けるとされている。

これにたいして、税金・電燈料・給水料の共同納入は福岡市や電燈会社の徴収業務を町で肩代わりしたものである。各表店世帯が市や会社に個々に納入するのではなく、町で一括徴収してからそれを納入するのである。出納責任者についての言及はないが、納税組合長であろう。

電燈料について補捉しておく。古溪町では大正九(一九二〇)年二月からその共同納入を始めた。「大正九年二月ヨリ電燈料集金帳」<sup>(18)</sup>に収められた電燈会社との「契約證」に次のようにある。

#### 契 約 證

【福岡市古溪町総代西頭宗太郎】外【廿二】名(以下単ニ甲ト称ス)ト九州電燈鉄道株式会社(以下単ニ乙ト称ス)ト左ノ契約ヲナス

一、甲ハ【町】内ニ住居スル現在及将来ノ電燈需要家全部ガ毎月乙

ニ支払フベキ点燈料ノ全額ヲ毎月貳拾五日迄ニ乙ニ払渡スモノトス

二、乙ハ前條ノ点燈料ニ対シ五分ノ割引ヲナスモノトス

三、甲ガ若シ第壹條ノ期日迄ニ支払ヲ怠ル時ハ乙ハ第貳條ノ割引ヲナサズ猶ホ場合ニ依リテハ該料金ノ払込アルマデハ全部ノ点燈ヲ中止スル事アルモ甲ニ於テ異議ナキモノトス

四、甲ハ此契約ニ対シ連帶ノ責任ヲ負フモノニシテ需要家ヨリ甲ニ料金ノ納入ノナキノ故ヲ以テ乙ニ対シ支払ヲ延期スル事ヲ得ザルモノトス

#### 〔後略〕

この「契約證」は印刷物で、右で便宜的に隅付括弧で引用した箇所はもともと空欄であり、そこに甲が必要事項を書き込む形になっている。つまり既定の書式の契約證がそのまま用いられている。他の町や村などとの契約にもこれが用いられたのである。古溪町の事情に合わせてとくに契約内容が作られたわけではないので、契約内容から古溪町のなんらかの特徴を読み取ることができない。以上を踏まえうえて契約内容をみてみよう。

この契約は電燈会社としては電燈料の滞納防止に有効であり、古溪町としては五分の割引があり、ともに好都合であった。後略箇所には、この契約の有効期間は一年間で、双方の提議がなければ一箇年ずつ延長することなども定められている。

町内で電燈を使用している全戸の電燈料（点燈料）は甲の二三人が責任者となって集めるとされている。さらに甲にたいして電燈料を納められない世帯があった場合でも、甲は電燈会社にたいして支払いを延期できないとされている。

しかし「契約證」に続いて綴じ込まれている大正九（一九二〇）年の

二月から七月までの徴収記録には、町にたいする電燈料の納入者として二三人ではなく二五人の姓名が挙げられている（表4の「大正九年二月」の段の二五人）。町を代表して電燈会社と契約を結び、電燈会社にたいして電燈料を納入する責任を負ったのは二三人だったが、その直後から町にたいして電燈料を納めたのは二五人ということである。余分な二人が誰だったのか、二人はなぜ契約を結ばなかったのか、契約を結ばなかったのになぜ電燈料を町に納めたのか、といった疑問には答えられない。

なお給水料について述べておくと、福岡市の上水道は大正一二（一九二三）年三月に完成し、市ではただちに給水事業を始めたが、しかし古溪町がいつから給水料の共同納入を始めたのかは不明である。

さて、「町規約」の第一八条には金銭の具体的な徴収法として、実際に必要と見込まれる一年分の町費・税金・給水料・電燈料の四つの総額を日割りにしたうえで、その額以上の金額を納めるとされている。これが日切掛金（普通、「日切り金」という）で、毎日徴収されたものである。第八条には日切計算期（計算日の意）は年に二回あり、それぞれ七月末日と二月末日とされている。一年を二分して日切掛金の徴収期間を設け、それぞれの終了時に納入額を計算するわけである。最終的な決算は一年単位で、第七条に「本町会計決算ハ毎年十二月末日ヲ以テ締切り翌年一月中ニ報告スル」とある。二月末日の日切計算日が決算日を兼ねていたのである。

ところが「古溪町別途積立規約」には「本町居住者ノ積立ハ日切ヨリ引サル事」とあり、さらに「決算ハ毎年一月新年宴会ノ時ニ報告スル」とある（決算日は前年の二月末日であろう）。日切掛金から積立金（祭礼当番費）が取り分けられることになっていたのである。つまり第一八条で「日割以上ノ金額」を納めることとあるのは、日切掛金を徴収する段階ではそのなかに積立金も含めていたからである。そのあと、積

立金は日切計算日に取り分けられた。

このほか、六つ目の金銭負担として衛生費があった。これは衛生組合の運営費として町の意志によって徴収・支出されるもので、衛生組合長が出納責任者であろう。この費用は祭礼当番費と同じく積立扱いであるが、その額は各世帯とも同額で各月一〇銭とされている。つまりこの費用は日割りではなく月切りの徴収である。これについても「決算ハ翌年一月中ニ報告スル」と第一四条にある。ただし具体的な徴収法については確認できなかった。

結論としては、古溪町では表店世帯主から徴収した金銭を四つに大別し、それぞれ町費会計・積立金会計・共同納入費会計（税金、給水料、電燈料）・衛生費会計として処理していたといえる。

第一五条には「本町居住者及び家主ハ別途積立ノ義務ヲ有ス事／但シ別途積金規約ヲ遵守スル事」とある。ここでいう「家主」とは、表店世帯主のうち、自分が所有し居住している家屋敷のほかにも町内に別の家屋敷（抱の家屋敷）を所有し貸し出している者を指している。したがって、自分が居住している屋敷の裏部分に貸家を所有し貸し出している者（裏貸家主）は含まれていない。また「別途積金規約」は「古溪町別途積立規約」のことである。

次に金銭の臨時徴収などにかんする諸条を紹介する。これも負担者は表店世帯主である。

（第二一条）

一、本町転住一戸ヲ構ヘタル者ハ見知金トシテ家賃ノ三分ノ一ヲ

（第二六条）

即時必ズ町総代ニ納金スルモノトス

（第一六条）

一、本町内現住者ニシテ入退営アル時ハ毎戸国旗ヲ掲揚シ送迎ス

ルモノトス

但シ入営者ニハ五円以上十五円以下ヲ役員協議ノ上贈与スル

モノトス

（第一七条）

一、本町内死亡者アリタル時ハ（五才以上）ハ全町会葬スルモノトス

但シ念仏講トシテ毎戸二十銭徴集贈呈スル事

当番ハ忌中者ノ両隣ニテ世話スル事

（第二二条）

一、本町ニ於テ軍事宿泊ノ時ハ各戸五十銭宛ヲ切立ル事

第一一条は、転入者が地借もしくは店借として表店に居住する場合、町に見知金（みりきん）<sup>(19)</sup>を納めることと定めている。この場合も「一戸ヲ構ヘタル」ことには違いないので、彼も町の正式な構成員となる。古溪町の出身者でなくとも、さらには地借や店借であっても、表店に居住すれば町の正式な構成員になれたという点は重要である。

第一六条は入営祝儀にかんする規定であるが、その徴収法については触れられていない。あるいはその都度徴収されたものではなく、既存の町費から支出されたものであろうか。第一七条は念仏講（香典）にかんする規定である。第二二条は近隣で軍事演習が実施されるさいの、演習参加兵士の町内宿泊に要する費用の徴収にかんする規定である。

第一六条の「本町内現住者」と第一七条の「本町内死亡者」はその内容からみて、「一戸ヲ構ヘ」ているか否かにかかわらず、文字どおり町内の全世帯の人間を指していると考えられる。

第二二条のあとには次の記述があり、ここで「町規約」は終わっている。

新年宴会（二月）

古溪禪師ノ御昼籠（一月五月九月）

櫛田神社ノ御昼籠（五月）

山笠行事（七月）

山笠行事を除けばいずれも古溪町が単独でおこなう行事である。「古溪禪師ノ御昼籠」は報光寺でおこなわれるお籠もりである。

なお聞き取り調査によると、裏貸家と貸間（表店の後方部、とくにその二階に多かったという）の電燈料と給水料については裏貸家主・貸間主である表店の世帯主が支払っていたそうである。この分は当然、実質的に貸家賃・貸間賃に組み込まれていたと考えられる。また、裏貸家世帯と貸間世帯には税金はかけられていなかったそうである。

## 二節 日切計算

第二の記事、「日切計算」をみてみよう。この記事は五つの日切計算日ごとに作成された日切掛金の徴収記録で、各負担者の日切掛金徴収期ごとの徴収額が記されている（一日ごとの徴収額ではない）。各徴収期を「第一期」「第二期」…「第五期」と仮称すると、次のようになる。

- 第一期 昭和一二（一九三七）年二月一六日から昭和二三（一九三八）年七月一五日まで、二二二日間。
- 第二期 昭和二三（一九三八）年七月一六日から同年二月一五日まで、一五三日間。
- 第三期 昭和二三（一九三八）年二月一六日から昭和三四（一九三九）年六月一五日まで、一八二日間。
- 第四期 昭和三四（一九三九）年六月一六日から同年二月一五日まで、一八三日間。
- 第五期 昭和三四（一九三九）年二月一六日から昭和三五（一九四〇）年二月一五日まで、一箇年分。

「昭和拾年第七月吉辰 町規約及ビ別途積立規約」の起筆直後からの日切掛金の計算ではなく、昭和一二（一九三七）年二月一六日から

の日切掛金の計算が記載されていることがわかる。第一期以前の徴収記録は何か他のものに記載されていたのだろうか。また、第三期以降は徴収期間や計算日が「町規約」第八条の規定からやや外れており、若干の改変が加えられたことが知られる。

五期全部の記述内容は表8にまとめたが、これをみると、徴収額は世帯ごとに異なっている。さらに各世帯の徴収額は徴収期によってかなり異なっている。

また第二期から第四期までは雲井という屋号（篠原トメの経営）とその捺印「篠原」が消えて替わりに半田という姓と捺印があるが、これを除けば第二期以降の姓・屋号はすべて第一期と同じである。しかし第五期の半田の捺印は「篠原」となっているの、半田と篠原が同一世帯に属していたことがわかる。したがって第一期から第五期まで、実質的には日切掛金の負担世帯に変化はなかったといえる。

第一期分のみ、原文を引用しておく。

### 日切計算

昭和十三年十二月十六日ヨリ

〳 十三年 七月十五日迄 式百十式日間

#### 差引渡高

一 四拾貳円十六銭	雲井	印(篠原)
一 貳拾参円四拾銭	松田	印
一 壹百円九十一銭	川野次	印(川野)
一 壹百五拾六円六十銭	幾度	印
一 壹百〇五円九十銭	片桐	印
一 六拾三円六十八銭	尾崎	印
一 四拾五円六十参銭	柴田	印
一 九拾五円六十六銭	泉	印

一 八拾七円五十五銭 瀬戸  
一 貳拾貳円〇八銭 西徳  
一 六拾壹円四十六銭 かね吉  
合計八百〇五円貳十参銭渡高  
一 不足 拾六円拾壹銭 七月廿七日請取 相長  
右全部計算済 七月廿七日

「差引渡高」(町からみれば差引受取高)とあるので、「日切計算」は計算日に積立金を差し引いたあとの額を記したものである。「雲井」と「かね吉」は屋号であるが、そのほか「川野次」「西徳」「相長」も屋号ないし通称で、それぞれ川野次吉、西頭徳太郎、西頭長右衛門を指している。川野次はかね吉の分家、西徳は西浜屋の分家、相長(西長ともいう)は相嶋屋の分家である。

相長こと西頭長右衛門の負担する日切掛金は日切りで納入されたものではなく、計算日に一括で納入されたものである。相長の条と同様の書式は第二期以降にもみられ、日切り納入を原則としつつも一括納入も認められていたらしいことがわかる。

ここで一つ注意しておくべきは、右の二三人が町にたいして金銭負担の義務を負っていた表店世帯主の全員ではないということである。

第一期の始まる直前に作成された「昭和十二年十月 支那事変特別町費」<sup>(20)</sup>には、その作成時に定められた特別町費の負担者名(姓または屋号)と徴収額が納税組合別に記されている。徴収額以外の記載事項をまとめると次のようになる。なお、これまでの史料分析と聞き取り調査から確認できた居住番地を丸括弧内に補っておく。

上組——雲井(1)・松田(2)・川野次(3)・幾度(4東)・片桐(4西)・柴田(6)・尾崎(5)・泉(18)・伊藤(不明)・岩

表8 古溪町上組分の日切計算

納入額(単位:円)	納入者名	捺印
第1期 昭和12年12月16日～ 計算日 13年7月15日		
42.16	雲井	有(篠原)
23.40	松田	有(川野)
100.91	川野次	有
156.60	幾度	有
105.90	片桐	有
63.68	尾崎	有
45.63	柴田	有
95.66	泉	有
87.55	瀬戸	有
22.08	西徳	有
61.66	かね吉	有
# 16.11	相長	有
[821.34]	合計	
第2期 昭和13年7月16日～ 計算日 12月15日		
1.86	半田	有
12.87	松田	有
17.85	川野次	有
56.31	幾度	有
49.85	片桐	有
34.40	尾崎	有
14.51	柴田	有
# 85.14	泉	有
39.19	瀬戸	有
76.92	[西徳]	有
# 82.91	川野吉平	有
[471.81]	合計	
21.70	不足	
[納入者名と捺印は無。西徳の分か]		

納入額(単位:円)	納入者名	捺印
第3期 昭和13年12月16日～ 計算日 14年6月15日		
200.66	半田	有
22.76	松田	有
129.31	川野次	有
166.02	幾度	有
69.96	片桐	有
71.84	尾崎	有
34.85	柴田	有
62.98	泉	有
14.83	瀬戸	有
20.52	西頭(ママ)	有
75.30	かね吉	有
[869.03]	合計	
7.96	不足	相長 無
第4期 昭和14年6月16日～ 計算日 12月15日		
17.24	半田	有
23.29	松田	有
122.21	[川野次]	有
69.44	幾度	有
57.85	片桐	有
31.47	尾崎	有
# 55.48	柴田	有
84.35	泉	有
12.51	瀬戸	有
# 105.91	西徳	有
1.31	かね吉	有
[581.06]	合計	
160.09	不足	川野次 無

納入額(単位:円)	納入者名	捺印
第5期 昭和14年12月16日～ 計算日 15年12月15日		
104.80	半田	有
58.29	松田	有
20.95	川野次	有
63.74	幾度	有
143.74	片桐	有
51.88	尾崎	有
93.02	柴田	有
9.23	泉	有
# 133.74	[瀬戸]	有
96.00	西徳	有(西頭カ)
57.87	かね吉	有(川野)
[833.26]	合計	
261.64	不足	瀬戸 無
33.60	違算分	柴田 有

「昭和拾年第七月吉辰 町規約及ビ別途積立規約」(「西頭資料」12)より作成  
※角括弧内は筆者の補足。シャープは計算日に一括納入されたらしき額。納入者名が屋号の場合、捺印があればその文字を丸括弧内に記入。

城 (d)・瀬戸 (19と20)・西徳 (21)・相長 (22)・かね吉

(23)

下組——蓮井 (7)・山浦 (8と9)・大野 (11)・山田 (13)・吉積

(14)・今泉 (15)・庄野 (a)・岡本 (12)

これを見ると「日切計算」で挙げられている一二名はいずれも上組に属していたことがわかる。したがって「日切計算」は上組分の徴収記録である。下組には下組分の徴収記録があったと思われるが、今日伝わっていない。

なお、表7では昭和四 (一九二九) 年四月に六番地の柴田喜助の借家人として山浦伊太郎の名がみえるが、彼は次節でみるように昭和一〇 (一九三五) 年七月までに一一番地の表店に転居し、右でみたように昭和一二 (一九三七) 年一〇月までには八番地と九番地に跨る表店にさらに転居している。

また、上組に属する伊藤と岩城が「日切計算」のほうに記載されていないが、その理由はわからない。

もう一つ。一〇番地に居住していた泉次郎には特別町費が課せられていない。甥の泉宏治氏の話などによれば、予備役の下士官だった彼は昭和一二 (一九三七) 年七月に日中戦争 (支那事変) が始まるとすぐに召集され、三年ほど従軍したという。出征軍人ということで、その家族にたいして特別町費は免除されたと考えられる。

### 三節 積立金の割当法

第三の記事、「古溪町別途積立規約」をみてみよう。この記事は前半部 (規約) と後半部 (名簿一覽) から成っているが、後半部では各人の居住番地を丸括弧内に補っておく。

#### 古溪町別途積立規約

一、本町山笠建設及び稚児当番執行ノタメノ費用トシテ積立ルモノトス

二、本町居住者 (世帯主) 并ニ家主ハ山笠及稚児当番ニ必要ナル積立金ヲ履行スル義務ヲ有スル事

三、積立金ハ左ノ方法ヲ以テ割当切立ルモノトス

イ 間口割

ロ 軒別割

ハ 等級割

但シ割方ハ町役員ニ於テ一ヶ年毎ニ改廃スルモノトス

四、積立金ハ昭和十年七月ヨリ昭和十七年七月マデ (本町山笠建設) 実行スル義務ヲ有スル事

但シ稚児当番ハ昭和十五年四月末日マデノ事

五、本町居住者ノ積立ハ日切ヨリ引サル事

六、決算ハ毎年一月新年宴会ノ時ニ報告スルモノトス

七、本積立金ハ別会計トシ町総代及町役員ニ於テ管理スル事

八、本町居住者ノ電燈料割戻金ハ山笠及稚児当番ニ必要スル積立金トシテ各自ニ絶対払戻シナサザル事

九、本町居住者が積立ニ加入シ若シ他町へ移転セラル、モ該積立金ハ払戻シセザルモノトス

十、本町内家主ニシテ不動産ヲ他ニ売却シタル時モ九條ト同シ

十一、積立金ハ山笠建設ヲ終了向総決算ノ上各自支出割方差引ノ上不足金ヲ生シタル時ハ取立過剰金アル時ハ直チニ割戻シスルモノトス

十二、家主ノ積立金ハ各年二回取立スル事

毎七月 毎一月

十三、各項承認ノ上捺印シ尤シ規約改廃スル時ハ各居住者ノ三分ノ

二以上ノ承諾ヲ得ル事

以上

昭和十年七月吉辰

右各條項承認ノ上記名捺印ス

昭和十年七月 日

切立金額 左之通り八月ヨリ取立

一、金五十三銭	半田浅次郎	印	(1)
一、金五十三銭	川野次吉	印	(3)
一、〃四十六銭	幾度虎一	印	(4東)
一、〃四十六銭	片桐亀吉	印	(4西)
一、〃五十四銭	尾崎幸祐	印	(5)
一、〃三十一銭	柴田喜助	印	(6)
一、〃三十五銭	蓮井		(7)
一、式十五銭	幸田		(8)
一、式十八銭	淀川豊次郎		(9)
一、三十八銭	泉次郎	印(泉次)	(10)
一、参十五銭	山浦	印	(11)
一、五十八銭	岡本	印	(12)
一、三十五銭	山田清	印	(13)
一、七十一銭	吉積健一 <sup>(x二)</sup>	印	(14)
一、式拾五銭	薄		(15)
一、三十八銭	庄野五郎	印	(a)
一、式拾五銭	西嶋		(cカ)
一、六十五銭	泉栄次郎	印	(18)
一、五拾四銭	西頭徳太郎	印(西徳)	(21)

一、五拾四銭 西頭長右衛門 印 (22)  
 一、一円四十二銭 川野又助 印 (23)  
 以上計

まず、前半部の全二三条の規約を検討しよう。祭礼当番用の積立金は古溪町に一八年に一度巡ってくる山笠本当番と三十数年に一度巡ってくる稚児当番(これも芥屋町と催合であるが、本当番・半当番の別はなく毎回対等の関係だった)にたいして使われることになっていた。古溪町が勤める次の山笠本当番は昭和一八(一九四三)年七月で、稚児当番は昭和一五(一九四〇)年の四月三〇日と五月一日であった。両当番費用とも、積立は昭和一〇(一九三五)年七月に開始されることに決まった。その負担者については第二条に「本町居住者(世帯主)并二家主」と定められている。

費用の割当法としては間口割・軒別割・等級割の三つがあり、毎年町役員が適切と思われる方法の一つを選ぶことになっていた。

間口割は宅地の表口の長さにおうじて割当額を決めるやり方である。軒別割はある金額を表店の軒数で割るもので、よって各表店への割当額は平等となる。等級割は負担者の納税額の多少におうじた賦課法である。ところで第五条には「本町居住者ノ積立ハ日切ヨリ引サル事」とあり、第一二条には「家主ノ積立金ハ各年二回取立スル事」とある。つまり抱の家屋敷を所有し貸し出している町内の表店世帯主は表店世帯主としての積立金を収めるほかに、抱の家屋敷の地主兼家主としての積立金も負担しなければならない。第一〇条では「家主」の替わりに「本町内家主」という語が使われているが、これも右の「家主」と同義である。後半部の検討に移る。後半部は町内の各積立金負担者名(各表店世帯主名)とその割当率の一覧となっている。負担者は二一人を数える。

積立金の徴収は、前半部の第四条には昭和一〇(一九三五)年七月か

ら開始するとあったが、後半部の冒頭には「八月ヨリ取立」とあり、わずかに齟齬がある。

割当額の合計は一〇円となっているが、これは各負担者の実際の割当額ではなく、一〇円を一〇〇パーセントとした各負担者の割当率である。日切掛金の各徴収期の終了時（つまり計算日）にその徴収期に必要な積立金の総額を決め、その額をこの割当率にもとづいて各負担者に割り付けたうえで各自の日切掛金から差し引き、積み立てることになっていたのである。たとえば半田浅次郎の場合、各徴収期に積立金総額の五・三パーセントが割り当てられていたことになる。

なお、「吉積健一」は「吉積健二」の誤記であろう。健一は健二の長男であるが、昭和二（一九二七）年生まれなのでこのときはまだ子供であった（吉積久幸氏談）。記名は自署ではなく、誤りを訂正せずに健二は捺印したのだろう。

第八条は電燈料割戻金を積立金に加えるという規定であるが、これは前述した電燈料の五分の割引分である。

ところで、この一覧には昭和一五（一九四〇）年末まで削除と加筆がなされている。つまり転出者の削除と転入者の加筆がなされている。しかしほとんど修正年月は記されていないので、引用にさいしては混乱を避けるために作成当時の原文のみを示した。ただしその加筆箇所をみると転入者にも割当金は課せられており、一〇円を目安とした徴収がしばらく続けられている<sup>(2)</sup>。

削除と加筆にさらに注目してみると、まず一三番地に居住していた「山田清」の転出後に「内田」（内田正雄）が、一五番地に居住していた「薄」の転出後に「今泉」（今泉十郎）が、それぞれ転入している。そして転入者の割当率はどちらも転出者の割当率に同じである。一方、転出入のなかった番地をみると割当率にはいっさい変更はない。以上のことから、この一覧の作成時に採用された割当法は間口割だったことがわか

り、それが少なくとも昭和一五（一九四〇）年末まで継続されたこともわかる。

しかし別の削除・加筆箇所をみると、「参十五銭」が割り当てられていた一一番地の「山浦」が転居したあと同所に転入してきた「大野」には「十一年六月ヨリ」「四拾銭」が割り当てられており、さらに大野の転出後に同所に転入してきた「島田」（次平または治平）には「十五年六月ヨリ」「参十五銭」が割り当てられている。

この増減の理由は不明だが、転出入や空家への入居などによって割当額の合計が一〇円丁度にならなくなっていたので、一一番地における二度の転入にさいして町が強引に合計額を一〇円に合わせようとして割当率を増減させたからだと考えておく。ちなみにこの一覧で修正年月が記されているのはここだけである。

二番地は一覧の原文には記されていない。金光教北九州教務センターによると、大正一〇（一九二一）年四月に同番地に金光教大浜小教会所が設立されたという。当時ここに住んでいた信者（表4の誰かかと思われるが、特定できなかった）の家を教会として利用したものらしい。

この番地には昭和初期まで秋山鉄工所があったが、その閉鎖後はしばらく空地になっていた（柴田邦夫氏談）。そのため原文には記されなかったわけである。やがて大浜小教会所が独立した建物として建てられ、教会に隣接して裏手にはこれを管理する金光教職員の住居も建てられ、松田岩男が息子の敏彦一家とともに着任した（柴田邦夫氏・泉宏治氏談）。おそらく、金光教ではこの屋敷を買収したうえで教会施設と住居を建てたのであろう。

一覧には「松田」に五〇銭を割り当てると加筆されている。松田岩男が表店世帯主として扱われたことがわかる。なお昭和一五（一九四〇）年の暮れか翌年の初めに松田岩男は死去し（泉宏治氏談）、敏彦がそのままあとを継いでこの教会の管理者となった。



八番地の「幸田」の条については、割当率はそのままに名前だけに抹消線が引かれている。九番地の「淀川豊次郎」の条については名前と割当率の両方に抹消線が引かれている。両者とも転出したわけだが、いずれも抹消事項に替わる加筆はない。しかしこれについては、一一番地に居住していた山浦が幸田と淀川の転出後に八・九番地を借地し、両番地に跨る家屋を建てて転居したものらしい。

昭和一〇年代の半ばには蓮井富三郎（七番地）・山浦伊太郎・泉次郎（一〇番地）の三家がこの順で並んでいたが、三家の表口は隙間なく接しており、蓮井家と泉家の表口がどちらも二間半程度しかなかったのに対し、山浦家の表口はそれよりかなり広がった（内田恵太氏談）からである。九番地分の割当率は抹消されたままだが、これもまた割当合計額の一〇円を維持するために、山浦には八番地分の割当率しか割り当てられなかったということだろうか。柴田睦夫氏は山浦について、

初めはうちの裏貸家に住んでいて商売用の高級な醤油を自転車で料亭などに配達していた。よそに店舗を構えていたわけではないので醤油は家の中かどこかに置いていたのだろうが、それは記憶にない。表店に移ってからはずっと配達を続けており、よくみかけた。

と述べておられた。お金を貯めて手狭な裏貸家から表店に移り、さらにより広い表店を建ててそこに移ったということらしい。

一六・一七番地については一覽に全く出てこない。泉宏治氏によると、この両番地は庄野悟郎（または五郎）居住のa番地および泉皮革問屋の小さな倉庫のあったb番地と同じく祖父の泉栄次郎氏の所有地で、

昭和一〇（一九三五）年ごろには大きな倉庫が立っていたと聞いている。そのあと時期は覚えていないが家屋に改築して渡部（または

渡辺）という人に貸したそうで、この人のことは覚えている。渡部さんのあと、昭和一三年ごろにハタ（秦か）という軍人の一家が越して来て、太平洋戦争の開始直後に出て行った。御主人が出征して、御家族は奥さんの実家に引き上げたそうだ。それからすぐに私の叔父の愛祐がここに分家した。ハタさんは福岡連隊に勤務していたらしいが、留守がちで、町の活動には参加していなかったようだ。

とのことである。両番地は一覽の作成当時はまだ倉庫だったのであろう。渡部についてはよくわからないが、町はハタから積立金を徴収できなかったようである。原文に載っておらず加筆もされていないのは、右の事情によるものと考えられる。

おそらくc番地に住んでいたと思われる「西嶋」の条について述べる。と、名前と割当率の両方に抹消線が引かれている。しかしこれらに替わる加筆はない。聞き取り調査によると後掲の表9に出てくる水浦次八はc番地に居住していたそうなので、西嶋の転出後に（西嶋の次かどうかはわからないが）水浦が転入したものだと思われる。ちなみにc番地のまえにはb番地の小倉庫があつて芥屋町筋に面していたわけだが、これを考慮に入れない形で西嶋も水浦も表店世帯主の扱いになっている。

一九番地と二〇番地も一覽の原文には記されていない。一覽作成当時は空地ないし空家だったらしい。のちにここには「瀬戸寛二」（または寛次）が転入し、四六銭を割り当てると加筆されている。

さて、昭和一六（一九四一）年一月になると第四の記事である「改正別途積立金」が作られ、積立金の徴収の改正が示されている。しかしこの時点での各積立金負担者名は示されているが、徴収そのものについては何をどう改正したのか書かれていない。内容は以下のとおりである。負担者は二〇人になっており、いずれも同筆で捺印はない。この記事の負担者については聞き取り調査に協力してくださった方々がよく記憶し

ておられたので、居住番地のほかに職業も丸括弧内に補っておく。

改正別途積立金

昭和十六年一月 日

半田浅次郎	(1. 席貸業)
川野次吉	(3. 仕出業)
幾度席一	(4東。畳店)
片桐亀吉	(4西。蒲鉾店)
尾崎幸祐	(5. 理髪店)
柴田喜助	(6. 燃料店か)
蓮井富三郎	(7. 建具店または文房具問屋)
山浦伊太郎	(8と9. 醤油問屋)
泉 次郎	(10. 18の皮革問屋に勤務)
島田次平	(11. 大工)
岡本三郎	(12. 樽問屋)
内田正雄	(13. 畳店)
吉積健二	(14. 薪炭問屋)
今泉十郎	(15. 飲食店)
庄野悟郎	(a. 青果店)
泉栄次郎	(18. 皮革問屋)
瀬戸寛二	(19と20. 金物問屋)
西頭徳太郎	(21. 株式会社福岡魚市場に勤務)
西頭長右衛門	(22. 貸問業など)
川野吉平	(23. 料亭)

この記事は松田岩男の死去の直後に作成されたものらしい。松田敏彦の名前がないのは、松田家は転出するのではないかと町が考えていたか

らではないだろうか。前述のように、松田家は結局町に留まった。

最後の記事、「昭和拾五年十月<sup>十五日</sup>須賀神社御神幸」については表9にまとめた。この記事は昭和一五(一九四〇)年一〇月になされた祇園社の御神幸にたいする町内寄附金一覧である。史実ではないが、博多の祇園社は天慶四(九四二)年に創建されたといわれており、その鎮座一千年祭としてこのとき御神幸がなされたのである。註(15)で触れたとおりこの記事の冒頭には「町総代 西頭徳太郎／取締役 川野吉平／全西頭長右衛門」とあり、そのあとに二三人分の寄附金の一覧が続いている。これがこのときの表店世帯主の全員であろう。

## ⑤戦時体制下の古溪町

昭和一二(一九三七)年七月に始まった日中戦争が長期化の様相をみせるなか、第一次近衛内閣は同年八月二四日に「国民精神総動員実施要綱」を閣議決定した。以後、これにもとづいて戦意高揚・戦争協力のための各種の官製国民運動が幅広く展開された。この運動は国民精神総動員運動と呼ばれ、昭和一五(一九四〇)年六月に始まる新体制運動に引き継がれていった。

このような運動を通じて戦時体制が強化されていくなか、古溪町ではまず前出の「昭和十二年十月 支那事変特別町費」<sup>(22)</sup>が作成された。支那事変特別町費とは国民精神総動員運動にかんする町内の共同事業に要する費用のことで、表店の世帯主たちが終戦直前までこれを拠出し続けた。そのあと「昭和十三年二月十一日 古溪町常会決議録」<sup>(23)</sup>が作成され、昭和一六(一九四一)年二月一四日まで書き継がれている。本章ではこの記録を中心に議論を進めていく。

この記録の冒頭に次のようにある。

表9 昭和15(1940)年10月の祇園社  
御神幸にたいする古溪町の寄附金

寄附金額(単位:円)	寄 附 者 名	記号
15.00	川野吉平	✓
8.00	泉 栄次郎	✓
10.00	西頭徳太郎	✓
7.00	吉積健二	○
5.00	西頭長右衛門	✓
5.00	尾崎幸祐	✓
5.00	半田浅次郎	✓
5.00	幾度席一	✓
5.00	瀬戸寛次	✓
5.00	松田岩男	✓
4.00	岡本三郎	○
3.00	内田	○
3.00	庄野五郎	○
3.00	島田治平	○
3.00	片桐亀吉	✓
3.00	川野恭平	✓
2.00	山浦伊太郎	○
2.00	柴田喜助	✓
2.00	蓮井富三郎	○
2.00	今泉十郎	○
2.00	水浦次八	○
2.00	岩城エイ	○
2.00	泉 次郎	○
計103.00	23人	

「昭和拾年第七月吉辰 町規約及び別途積立規約」(「西頭資料」12)より作成

※典拠には寄附者名の下に ✓ または ○ が付されているが、✓ は納税組合の上組、○ は下組を意味している。

この最初の常会では、常会長に町総代の西頭徳太郎が、副常会長に副町総代の川野吉平が、同じく副常会長に衛生組長の西頭長右衛門が就任している。町役員をそのまま常会の会長・副会長に転用したのである。最初の常会での決議事項のうち、主要なものを挙げておく。以後の常会の開催日時は毎月一三日午後七時からとし(その後変更あり)、開催場所は町内にある金光教会とすること。さらに「各戸必ズ一名以上常

会ニ出席スル事」と「常会ノ経費ハ特別町費ヨリ支出ノ事」も決まった。

一、昭和十三年二月十三日古溪町常会ノ発会式ヲ挙行シ国民精神総動員ノ主旨ニ副ワン事ヲ期ス

常会とは、国民精神総動員運動および新体制運動のもとで「或特定の人々が、定期的に万民翼賛、臣道実践の目的の下に集合すること」である(福岡市役所編 一九六五 二九〇)。

戦争の長期化とともに全国的に市常会・町内会常会・隣組常会などが整備されていった。古溪町でもこのとき初めて常会が開かれた。ただしこのとき古溪町ではまだ町内会は組織されていなかったため、町内会常会ではなく町常会という形であった。

こののち、昭和一三(一九三八)年五月一三日開催の第四回常会において、「衛生費徴収ハ本日ヨリ左記通り実行ノ事」として「表世帯一戸十五銭 裏世帯二戸十銭」と決まった。それまで裏店(裏貸家)に居住する世帯には衛生費は課せられていなかったが、以後、彼らもこれに町に納めることになった。町にたいしてわずかながらも責任を負う立場になったといえる。ただし彼らの負担額は表店世帯のそれより低く設定された。

さらにのち、昭和一五(一九四〇)年八月六日開催の第三一回常会の議事録には出席者の姓または屋号が次のように記されている。

## 出席者

半田、松田、川野、幾度、片桐、尾崎、柴田、山浦、蓮井、岡本、島田、内田、吉積、今泉、庄野、泉、泉、瀬戸、西徳、相長、川野、水浦、岩城

以上全戸出席

として前回と全く同じ二三人の姓または屋号が挙げられている。さらにその直後には「外 裏、二階住者ノ総出席」と記されている。ただし裏および二階の居住者については姓などは記されていない。

したがって最初の常会での「各戸必ず一名以上常会ニ出席スル事」という決議における「各戸」とは、表店を指している。同様に、第三一回常会における「全戸」も表店を指している。「一戸ヲ構ヘタル」、町の正式な構成員とは表店の世帯主だった。彼らだけが町の寄合に出席して町の運営に参加でき、町にたいして種々の金銭負担の義務を負っていたことが、ここからも確認できる。

一方、裏店居住者と二階居住者（表店内の借間人）は第三二回常会から常会への出席を認められるようになったわけだが、しかしこの改変の理由は古溪町の内部事情によるものではない。このときの常会での決議事項の一つに次のようにあるからである。

一、新体制ニ依ル常会ノ細胞組織トシテ其ノ命ニヨリ隣保組合ヲ設定ス

町内トシテハ全戸ヲ四割シ各隣保組合制度トス 左ニ各隣保組合ノ班長ヲ定ム

第一班長、川野又吉

第二班長、泉省太郎

第三班長、尾崎幸祐

第四班長、吉積健二

尚此組合ニ各女子組ヲ設ケ女組ニ会長ヲ定ム

この決議は明らかに、四日前の九月一日に発せられた「内務省訓令第一七号 部落会町内会等整備要項」（同日付「官報」に掲載）にもとづいてなされたものである。

この訓令の目的の一つは「隣保団結ノ精神ニ基キ市町村内住民ヲ組織結合シ万民翼賛ノ本旨ニ則リ地方共同ノ任務ヲ遂行セシムルコト」であった。内務省は村落部の部落会と都市部の町内会を本格的に整備することにしたのである。具体的には「部落会及町内会ハ区域内全戸ヲ以テ組織」し、「部落常会及町内常会ハ会長ノ招集ニ依リ全戸集会スルコト」が定められた。さらに「部落会及町内会ノ下二十戸内外ノ戸数ヨリ成ル隣保班（名称適宜）ヲ組織」し、「隣保班ノ常会ヲ開催スルコト」も定められた。この訓令を受けて古溪町では取り急ぎ隣保班（隣保組合）のみは設けたわけである。

この訓令にいう「区域内全戸」とは文字どおりの全戸であり、そこで古溪町においても裏店居住者と借間人を新たに常会に出席させることにしたのである。以後も通常の常会には、彼らは出席している。

ひとまずこのあたりに戦時体制下における町組織の変化を看取ることができる。国策を短期間に町内の全住民に浸透させ戦争遂行に積極的協力させるため、町内全戸を平等に組織化したのである。しかしこれは上からの改変であり、戦時体制への協力という面以外で町内全戸の平等が確立されたわけではない。というのは、裏店・借間の世帯主にはあいかわらず町役員の選挙権ならびに被選挙権は与えられなかったからである。

そのことは、同じく昭和一五（一九四〇）年の一月二日に開催された「臨時常会」から確認できる。

このとき、町内会創立・旧町総代以下の町役員の辞任・隣組創立（四班から成る隣保組合を二組から成る隣組に改組）・町内会長の選任・隣組長の選任・学校委員の選任がなされた。その投票の結果は次のとおりである。

町内会長 当選 川野又助

次点 西頭長右衛門

〃 泉省太郎

〃 尾崎幸助

隣組長 一ノ組 西頭長右衛門

全 二ノ組 泉次郎

学校委員 西頭徳太郎

続いて、このときの出席者二人の姓または屋号が挙げられている。

この二人は、第三一回と第三二回の常会で出席者として姓または屋号の挙げられていた二三人のうち、岩城を除いた全員である。<sup>26</sup>つまり、いずれも表店の世帯主である。彼らは裏店・借間の世帯主抜きで臨時常会を開き、町内会の役員を選挙した。選ばれたのも表店の世帯主である。

従来の町役員選挙の場合と同様、町内会役員選挙についても表店の世帯主だけが選挙権・被選挙権をもっていたことが知られる。そのため町内会役員選挙のための臨時常会については裏店・借間の世帯主を招く必要はなく、実際にも彼らは出席しなかったというわけである。

一方、昭和一六（一九四一）年二月一四日開催の常会（通常の常会としては第三七回に当たる）では、念仏講と入宮祝儀にかんして次の決議をみた。

一、念仏講

表並

参拾銭

準世帯

拾五銭

但シ準世帯不幸ノ場合ハ一律二拾五銭切立

現住者ノ直属者タル事

一、入退宮<sup>（マコ）</sup>応召者ニ対シテハ

軍服代

（表並、脱力）

拾円程度

準世帯

五円

店員

参円

まず、準世帯（裏店世帯と借間世帯）からも念仏講が徴収されることになった。ついで、従来その額が町役員の協議によってそのつど決められていた入宮者にたいする町からの祝儀がこできちんと定められた。しかし両条とも準世帯の人間は表店世帯の人間よりも一段低い扱いに留められている。さらに店員はそれよりも低い扱いとなっている。

なおこのときの常会では、前年末の町内会と隣組の発足を受けて「常会新組織ニ伴フ隣組分離常会開催並ニ五日実施ニ決定」となった。従来の町常会を町内会常会とし、それとはべつに毎月五日に隣組常会を開催するという意味である。内務省訓令にそつて町内会常会と隣組常会をそれぞれ開催することにしたのである。そしてこのときの町常会を最後に「昭和十三年二月十一日 古溪町常会決議録 古溪町」の記述は事実上終わっている。

このころの準世帯の数についても付言しておく。昭和一五（一九四〇）年一月一五日開催の第三四回常会の議事録にはこのときの出席者三六人と欠席者一〇人の、計四六人の姓または屋号がきちんと挙げられている。これが当時の町内の全世帯である。したがって、これから前掲の表店世帯主の二三人を除いた残りの二三人が準世帯主となる。その準世帯主二三人の姓は左のとおりである。

山口・明石・牟田・石藏・大曲・吉岡・亀崎・藤木・大庭・綱脇・古賀・小林・池田・梅崎・平・鴨打・大井・富山・小松・安藤・後藤・添田・遠藤

以上みてきたとおり準世帯の人間は町の正式な構成員とは認められていなかったといえるが、では彼らは山笠本番運営はともかくとして、山笠への参加は認められていたのだろうか。これについては聞き取

り調査から、認められていたことが確認できた。

追い山では多数の加勢人が必要とされていたが、山笠本当番にかんする古溪町の支出記録<sup>(28)</sup>によると、古溪町は昭和一七（一九四二）年七月一日に加勢町・藏本町・芥屋町に合せて酒三升（六円七五銭分）を贈っている。この日の追い山終了後、西町流に来ていた加勢町<sup>(29)</sup>、同年の山笠当番の藏本町、来年の山笠半当番の芥屋町にたいして、来年の山笠本当番の古溪町が協力要請のために酒を一升ずつ贈ったのである。

加勢町の人間以外にも昇き手と後押しの要員は多いほどいいわけで、とくに古溪町は戸数の少ない小町だったので、準世帯の人間も山昇きへの参加は認められていた。戦時下で出征男性が多くて男手が不足していたことも考え併せると、なおさら歓迎されたと考えられる。同じ理由で店員と奉公人の参加についても原則的には認められていたという。

ところで、博多では江戸時代以来（あるいはそれ以前から）、町ごとに男性による年齢階梯制が存在し、近代においては子供組（六歳ごろから）・若手組（または若者組。一五歳ごろから）・中年組（二五歳ごろから）・老人組（または年寄組。五〇歳ごろから）という四つの年齢集団があったことが知られている（博多山笠行事記録作成委員会編 一九七五 一～二七）。

前述した山笠本当番にかんする古溪町の支出記録<sup>(30)</sup>にも、「子供組」への言及こそないが、「若手組」「中年組」「老人組」という語がみえる。古溪町にも他町と同様の年齢階梯制があったことが知られる。同町の準世帯の人間や店員・奉公人は祇園山笠のさいにはいちおう年齢階梯制に組み込まれていたという。つまり該当する年齢集団に加わって活動していた。しかし準世帯の大人は祭祀組織の役職にはやはり就けなかったという。

## ⑥聞き取り調査からみた昭和前期の古溪町

### 一節 情報提供者について

筆者は平成一八（二〇〇六）年一月一日、福岡市博多区において、戦前生まれの古溪町関係者数名から、昭和前期の古溪町にかんする話を伺うことができた。さらに二月一二日までしばしば電話による補足調査をおこなった。おもな情報提供者五名の御氏名などを御本人の許可を得たうえで、以下に記しておく。

◎柴田睦夫氏。大正一四（一九二五）年二月二日、古溪町六番地の柴田喜助氏の長男として生まれる。同番地は喜助氏の所有地だった。喜助氏は初め家業の豆腐屋を営んでいたが、睦夫氏が物心ついたころには他町の吉田金物問屋に勤務していた。その後、時期ははっきりしないが退職して燃料の小売店を始め、コークスや練炭などを扱った。六番地にはいずれも二階建ての三棟の家屋があった。柴田家は道路に面した母屋に居住していた。中の棟は小さな中庭（坪庭）を挟んだむこう側にあり、母屋とは短い縁側（表口からみて右側に位置）で繋がっていた。さらにその奥にも別棟があった。三棟とも通り土間（表口からみて左側に位置）があり、一階に炊事場があった。中の棟と奥の棟はそれぞれ階ごとに貸し出されていた。

◎柴田邦夫氏。昭和七（一九三二）年三月八日、古溪町六番地の柴田喜助氏の三男として生まれる。睦夫氏の弟。父喜助氏は体調を崩して吉田金物問屋をやめて長く自宅で療養しており、退職後に燃料店を始めたのは実質的には御母堂であったということである。また、裏貸家の借主は

いずれも家族持ちだったという。

◎泉宏治氏。昭和六（一九三二）九月二日、古溪町一八番地の泉省太郎氏の長男として生まれる。弟に恒次郎氏がいる。省太郎氏は皮革問屋を営む栄次郎氏の長男で、栄次郎氏と同居していた。同番地は栄次郎氏の所有地だった。栄次郎氏には省太郎氏のほか次郎・俊郎・愛祐という息子がいた。宏治氏が物心ついたところには次郎氏はすでに結婚しており（第一子である長女が昭和一〇（一九三五）年一月に誕生）、町内の一〇番地（栄次郎氏所有）に居住し、父の間屋に通っていた。俊郎氏は太平洋戦争中は佐賀市で配給店を営んでいた。愛祐氏は太平洋戦争開始後ほどなく実家を出て、栄次郎氏所有の一六・一七番地に転居し、父の間屋に通った。栄次郎氏は本町内家主に該当するが、昭和一〇年代に彼以外に本町内家主がいたのかどうかは確認できなかった。

◎内田恵太氏。昭和八（一九三三）十一月一日、石堂町流上金屋町の内田正雄氏の次男として生まれる。兄に繁樹氏がいる。恵太氏が生まれた当時、正雄氏は上金屋町から他町の畳店に通っていた職人だった。昭和一一（一九三八）年秋、古溪町一三番地の畳職人山田清が店を畳んで他町に転出するさい、正雄氏はその屋敷と家屋を借り受け（つまり店借）て古溪町に転入し、独立した。山田は他町に居住して古溪町に家屋敷を所有する形となったわけだが、彼は「本町内家主」にたいして「本町外家主」または「不在地主」といえる。昭和一〇年代には彼以外にも本町外家主はいたと思われるが、確認できなかった。終戦直後の福岡市による区画整理のさい、正雄氏はこの番地の地主となった。なお、この内田家は幕末・明治初期に古溪町にいた今津屋の内田家とは無関係である。

◎吉積久幸氏。昭和一二（一九三七）年三月三日、古溪町一四番地の吉

積健二氏の四男として生まれる。長兄が健一氏、三兄が隆二氏である。同番地は健二氏の所有地だった。健二氏は薪炭問屋を営んでいた。

ところで、この聞き取り調査は青柳曙設伸氏と西頭敬一郎氏の御尽力によって実現した。聞き取り調査に先立ち、両氏は系図1の作成にさいして、平成一七（二〇〇五）年一〇月に西頭家の菩提寺である正定寺（石堂町流上堅町）で過去帳と位牌を調査してくださった。両氏についても説明しておく。

◎青柳曙設伸氏。昭和三（一九二八）年八月一〇日生まれ。生家は呉服町流中市小路で、幼少のころ同流奥小路に移転。系図1の青柳千代吉氏の孫である。家が近かったことと親戚が多かったことから戦前の古溪町に頻繁に遊びに来ていた。故西頭昭三氏とは奈良屋小学校で同級生だった。

◎西頭敬一郎氏。昭和二〇（一九四五）年十二月一日、古溪町二番地の西頭長右衛門氏の長男として生まれる。同番地は長右衛門氏の所有地だった。敬一郎氏が長右衛門氏などから聞いたところでは、長右衛門氏は大正時代には他町の紙与呉服店に勤務していたという。大正一四（一九二五）年、福岡市初の百貨店である玉屋デパートが中洲（図1で那珂川に位置している細長い中洲のこと）に開業するさい、紙与呉服店はこれに吸収合併されることになった。長右衛門氏はこれを可とせず引退し、以後、終戦時までさまざまな職に従事したという。その間、一貫して貸間経営をおこなっていた。家族向けではなく学生向けで、ほぼ常に一人か二人、学生がいたという。

## 二節 日切り銭集めと町会計

陸夫氏は上組の日切り銭（日切掛金）集めについて次のように語ってくれた。

日切り銭集めは一日交替の当番制で男子小学生の仕事だった。表店世帯の子供だけがやり、貸間や裏貸家の子供はやらなかった。他の町でも男子小学生が集める場合が多かったが、古溪町は世帯数が少なく子供も少なかったので、一年生のときから六年生のときまで長くやった。当番前夜に隣の家から帳面と「鬱金袋」が回って来た。帳面には上組の表店各家の名前と収めるべき金額が書いてあった。当番当日は学校から帰宅したあと夕食時ぐらいまでに上組を回って日切り銭を集め、鬱金袋に入れていった。受取のさい、捺印はもらわなかったと思う。記憶にあるかぎり、払わなかった人はいなかった。だいたい一戸五銭程度の額で、皆きちんと払ってくれた。集め終わると家に戻って親に帳面と鬱金袋を渡した。親はそれを町会計の所に持って行き、町会計がすぐに検めた。それが済むとお金は町会計が預かり、帳面と鬱金袋は返却された。それから親が次の当番に帳面と鬱金袋を届けに行った。

邦夫氏の談話もこれとほぼ同じである。やはり上組に属していた泉氏の談話もほぼ同じであるが、日切り銭集めを始めたのは三、四年生のころだったという。帳面が読めてお金の計算ができるようになってからで、一、二年生のころはやっていなかったそうである。また下組の吉積氏は昭和一八（一九四三）年四月に小学校に上がったが、日切り銭集めをしないまま終戦を迎えたそうである。どうやら日切り銭集めの開始時期は町が決めていたわけではなく、各世帯の親が決めていたようである。

なお泉氏によると、当番順は柴田家（六番地）、泉家（一八番地）、瀬戸家（一九・二〇番地）だったそうで、上組では番地数の小さい家から大きい家へと当番を回していたようである。

下組の内田氏の話では、たぶん一年生ぐらいに日切り銭集めを始めたと思うが、五、六年生ごろには、すなわち昭和一九、二〇（一九四四、五）年ごろには太平洋戦争の激化のせいか日切り銭集めをしていたかどうかよく覚えていないそうである。

そして下組ではいくつか細かい点で上組とやり方が異なっていたという。下組では受取のさい、相手が帳面に捺印した。また金を入れる袋にはとくに呼び名はなかった。さらに帳面と袋のほかに当番札というのがあった。蒲鉾板二枚程度の大きさの木の札で、当番前夜に帳面と袋と一緒にまへの当番から渡された。これをすぐに家の入り口に掛けておき、翌日当番が終わると帳面と袋と一緒に親御さんが次の当番に渡したということである。

なお内田氏によると、当番順は吉積家（二四番地）、内田家（一三番地）、岡本家（一二番地）だったそうで、下組では番地数の大きい家から小さい家へと当番を回していたようである。

当番の家に男子小学生がいない場合（または男子小学生がいてもまだ当番を勤めていない場合）、泉氏の話ではその家の主婦が、内田氏の話では小学校を卒業した年長の男児が日切り銭を集めていた覚えがあるという。つまり上組でも下組でも表店世帯はすべて日切り当番を勤めることになっており、当番を勤める男子小学生がいればその子が、いなければ他の人間が代わりに日切り銭を集めるという形であった。

日切り銭集めは表店世帯の役目であり、とりわけその世帯の男子小学生の役目であった。原則として、子供組の活動の一つとしておこなわれていたと考えられる。町にとつて有為な人間を作ることを目的に、日常生活のなかでなされた社会教育の一環だったといえる。



ところで青柳氏によると、奥小路では町内会の運営が隣組を単位としておこなわれるようになる、日切り銭の徴収が男子小学生から隣組長の仕事になったという。さらに博多の町はだいたいどこでも同じだったと御教示くださった。

この点を考えてみる。前述のとおり、古溪町では昭和一五（一九四〇）年一二月二日に町内会と二つの隣組が創立され、一ノ組（上組に相当）の隣組長には西頭長右衛門氏が、二ノ組（下組に相当）の隣組長には泉次郎氏が就任した。しかし上組では、同年の邦夫氏と泉氏がいずれも昭和一九（一九四四）年三月の小学校卒業まで日切り銭集めをしていたという。一方、下組でも、内田氏は昭和一八（一九四三）年ごろには確かに日切り銭集めをしていたそうである。また情報提供者はいずれも、男子小学生の代わりに隣組長（またはその他の大人）が日切り銭を集めていた記憶はないとのことである。

以上のことから考えると、かりに古溪町でも隣組長などが日切り銭を集めていたとすれば、それは昭和一九（一九四四）年の春以降のことだと推測される。しかしこのあたりは精確には確認できなかった。

町会計の数については、柴田兄弟と泉氏は一人だったと思う、と述べておられた。そして柴田兄弟によれば、西頭長右衛門氏が長くこれを勤めていたという。ところが内田氏によれば、名前は記憶していないが、町会計は上組と下組にそれぞれ一名、計二名いたはずだという。そして上組当番は上組会計に、下組当番は下組会計に日切り銭を届けていたと思う、とのことである。ある時期から町会計は一名から二名に変わったのだろうか。また、内田氏という町会計とはあるいは隣組長のことだろうか。このあたりも精確には確認できなかった。

### 三節 居住形態と営業の特徴、その他

五人のうちで最も若い吉積氏を除く四人の話では、昭和一〇年代半ば

の上組の表店世帯主はほとんど全員が居付地主、すなわち居住番地の地主だったという。ただし二番地は金光教の所有地だったと思われ、d番地の岩城エイについてははっきりしない。それ以外の表店世帯主が全員居付地主だったそうである。太平洋戦争が激化すると、三番地の川野恭平のように疎開してその旧宅を店貸する例もあったという（泉氏談）。

一方、下組の表店世帯主は地借または店借が多く、上組より転出入が激しかったという。昭和二〇（一九四五）年六月一九日のアメリカ軍による福岡市への大空襲で古溪町が壊滅したあと、終戦後になっても下組の表店世帯主のほとんどが町に戻らなかったのは、土地持ちが少なかつたからだ（内田氏談）というのは、そのとおりであろう。しかし個々の世帯主については居付地主・地借・店借の別はあまり確認できなかった。つまり前述した泉次郎氏、泉愛祐氏、内田正雄氏、吉積健二氏以外は事情が確実ではない（ただし山浦伊太郎はおそらく地借であろう）。

貸間経営については、四人とも、正確な数はわからないが多くの家があった。古溪町ではべつに珍しいものではなかったと述べておられた。手軽に現金収入を補えたからであろう。戦前の古溪町の家屋はほとんど二階建てで（これは博多全体の傾向でもあった）、貸間は母屋（表店）の後方部、とくにその二階に多かったという。

貸間経営より手間のかかる裏貸家経営については、多くはなかったという。四人がともに挙げられた例としては、柴田家の裏貸家と一一番地の島田次平の裏貸家だけである。島田家では裏手の蔵を貸家としていて、昭和一〇年代には石藏家という四大家族が長く住んでいたという。青柳氏の話でも、町内のすべての番地に出入りしていたわけではないので正確にはわからないが、記憶にあるかぎりでは裏貸家は二、三軒であったという。なお古溪町には長屋形式の裏貸家はなかったそうである。

ここで島田次平について補足しておく。表4には大正時代の一一番地の世帯主として島田次助と島田次三郎の名が出ている。聞き取り調査で

は確認できなかったが、次平はあるいは彼らの家族で、他町に転出したあと再び古溪町の旧宅に戻って来たのだろうか。

それはともかく、彼は大工を職としており、昭和一八（一九四三）年に古溪町が山笠本当番を勤めたさいには「山大工」の棟梁を勤めた。山大工の仕事は二つある。一つ目は、組み立てた山笠の保管場所たる山小屋を当番町内の通りにあらかじめ建てておくことであり、二つ目は、山笠の組み立て（山笠建設）の最初の段階である山笠台の組み立てをおこなうことである。そのあとの段階（山笠棒の取り付けや飾り物の取り付けなど）は「日雇」または「日傭方<sup>ひようかた</sup>」と呼ばれる数人の人間がおこなう。ちなみに古溪町ではこのとき、日雇棟梁として島田伊平という人物を雇った。島田次平の血縁者であろうか。この点も確認できなかった。

話題を替えて昭和前期の古溪町の営業の特徴について述べる。前述のとおり古溪町では大正時代になると多様な営業者が展開し、町としての一定の営業傾向はなくなっていた。しかし魚問屋という同業者の集住がみられなくなったかわりに、「花街の消費生活を支える商いをする家が増えていった」（青柳氏談）ということはいえそうである。花街というのは、古溪町のすぐ東にあった芸者街の相生町のことである。

福岡県は明治一五（一八八二）年に福岡と博多に散在していた町芸者（遊郭に属さない芸者）を萱堂町に集住させた。六年後には隣の釜屋町との間に東西路が通され、置屋・待合・料亭が集まった。明治二二（一八八九）年にはこの一帯を相生町と呼ぶようになり、芸者の管理事務所たる券番も設けられた。相生券番は大正時代以降は中洲券番に次第に押されていったが、それでも昭和一二（一九三七）年には一八六人もの芸者を抱え、相生券番としての最盛期を迎えた。しかし太平洋戦争による料亭の閉鎖や奢侈の禁止で寂れていき、昭和一八（一九四三）年に解散した〔竹内他編 一九九一 四二〇。井上 一九八七 一〇二〕。

古溪町で大正時代に開業した料亭のかね吉（二三番地）と昭和初期に

開業した席貸業（待合）の雲井（一番地）は町内の東端すなわち相生町を臨む場所に位置しており、相生町の消費生活にかかわることを明確に意図していたといえる。相生町の存在は程度の差こそあれ、古溪町の他の商家にも利益をもたらしたと考えられる。

町並みについて簡単に述べる。内田氏によれば昭和一〇年代の古溪町の母屋はすべて屋敷いっぱいに表口を広げており、隣の家と隙間なく続いていったという。例外は二番地の金光教会で、道路からやや奥まった所に位置しており、そのまえば小さな広場になっていて子供たちの遊び場だったそうである。また、庄野青果店（a番地）や岩城家（d番地）のように芥屋町筋に面した家もあった。家屋のほとんどが二階建てだったのは前述のとおりである。

なお邦夫氏によると、岡本家（一二番地）と吉積家（一四番地）は三輪トラックをもっており、配達に使われていたという。町内で車をもっていたのはこの二軒だけで、もちろん自家用車はなかったという。

## ⑦ 昭和一八年の古溪町の祇園山笠経営

### 一節 山笠本当番運営の経過

西町流は延享元（一七四四）年以来一一箇町で構成されており、古溪町は芥屋町と催合で山笠当番を勤めていた。また奈良屋番と奥小路町も催合であった。しかし年次は特定できないが廃藩置県のころに奥小路町は西町流から呉服町流に所属が替わったため、明治以降の西町流の諸記録には同町は出てこない。そのため時折変則的になることはあったが、明治以降の西町流の山笠当番順は以下になった。

竹若町、上西町、藏本町、古溪町・芥屋町、万行寺前町、箔屋町、

## 釜屋町、下西町、奈良屋町

古溪町と芥屋町は九年に一度の山笠当番が来るたびに本当番と半当番を交互に勤めていたわけだが、両町の催合においては、当番費用については本当番だけが負担し、半当番は自町の間人を本当番の指揮下に入れるだけであった。<sup>(31)</sup>

古溪町は大正一四（一九二五）年に本当番を、昭和九（一九三四）年に半当番を勤めた。その後、すでにみたように昭和一〇（一九三五）年八月から、次の本当番年である昭和一八（一九四三）年に備えて山笠本当番費用の積立を始めた。

そして積立以外の山笠本当番にかんする本格的な準備は昭和一七（一九四二）年六月八日に始められた。以下、本節では「山笠準備控帳」<sup>(32)</sup>にもとづいてこのときの古溪町の山笠本当番運営についてみていこう。

この日、町内の六人が来年の山笠本当番にかんする最初の会合を開いた。同日条に「山笠受取当番二付キ話合ス」と説明されている。山笠受取当番とは来年の山笠当番町、すなわち古溪町のことである。普通、これはたんに「受取町」と呼ばれる。出席者は泉栄次郎・西頭徳太郎・川野又助・西頭長右衛門・尾崎幸祐・吉積健二の六名であった。

このときの町総代は川野又助とある。泉栄次郎は前回本当番時の町総代で、西頭徳太郎は川野又助のまえの町総代である。新旧の町総代が顔を揃えている。このうち、西頭長右衛門も昭和一九（一九四四）年四月には町総代を勤めていたことが知られる。<sup>(33)</sup>残りの二人、尾崎幸祐と吉積健二は隣保組合の班長を勤めたこともあった。六人とも町の有力者といえる。

七月一〇日、古溪町の依頼に応じ、島田伊平が来年の同町の「日雇棟梁」を引き受けることになった。

七月一二日、当年の山笠当番の蔵本町から山笠台とその附属品（台幕

や大弓など）を二五〇円で古溪町が買収することで両町は合意した。

西町流では山笠を構成する主要部位のうち、山笠棒は流の共有としていたが、山笠台は当番町の所有で、受取町が附属品も含めてこれを買取る形で毎年の追い山終了後にその受け渡しがおこなわれていた。その額は、ここにみられるように二町間の話し合いで決められていた。山笠台の売買というのは奇妙な慣例にみえるが、一つには受取町が次の年にきちんと当番を勤められるだけの費用を準備しているかどうかを確認する意味合いがあったのではないだろうか。

七月一五日、追い山終了後、蔵本町および芥屋町の若手の協力も得て、古溪町は山笠台を自町に運び込んだ。

明けて昭和一八（一九四三）年、いよいよ古溪町の山笠本当番年である。同年の祇園山笠関係事項について一つ一つ細かく議論する余裕はないので、以下、重要事項のみを紹介する。

一月一三日、山笠建設について会合が開かれ、あわせて山笠役員が選定された（表10）。ただし選定のやり方は書かれていない。姓名ないし

表10 昭和18(1943)年の古溪町の山笠役員

役 職	姓 名	付記事項
山笠建設委員長	泉栄次郎	山笠会計 町総代
山笠建設委員	西頭徳太郎	
〃	川野又助	
〃	西頭長右衛門	
山笠取締	尾崎幸祐	就任 解任 〃
〃	泉省太郎	
〃	吉積健二	
山笠衛生	今泉十郎	
〃	泉次郎	
山笠委員	泉愛助	
〃	島田治平	
〃	内田正男	
〃	庄野俊雄	
〃	幾度茂樹	

「山笠準備控帳」（「西頭資料」15—1）より作成

※「泉愛助」は「泉愛祐」の誤記で、「内田正男」は「内田正雄」の誤記。

姓をみるこれまでたびたび言及した人物かそれと同姓の人物ばかりで、表店の世帯主ないしその子弟が選定されたことがわかる。<sup>(35)</sup>

委員長を含めた四人の山笠建設委員のうち三人が新旧の町総代であり、一人は次の町総代となった。つまりは少しまえに列挙した四人である。

山笠建設委員は町総代級の人物が勤める役職であったことが窺える。この役職はもちろん山笠当番町が山笠を組み立てる年にのみ、すなわち古溪町の場合は山笠本当番の年にのみ設けられたものである。

一方、山笠委員には就任者一名と解任者二名がいることから、本当番年以前から山笠委員が存在していたことが知られる（残り二名は留任者ということ）。非番年には他の非番の町々とともに当番町の指示にしたがつて山昇きをおこなうので、祇園山笠経営専任の役職である山笠委員は非番年にも存在していなければならないわけである。これは山笠取締についても同様である。

一月二七日条には次のように書かれている。

町總代及山笠取締両名、櫛田神社ヨリノ招キ<sup>(二、脱カ)</sup>応ジ六当番集合シ、其ノ節、山笠建設ノ事ニ付、各当番ノ意見ヲ開陳ス。当町總代ノ意見トシテ、山笠ハ昇山ヲ建設スルモ飾山笠ハ時局ヲ鑑ミ遠慮スル由申述ベテ、散会ス。

六山笠当番町の初寄合において、川野又助が当年の祇園山笠では昇山（昇き山）は建てるが戦時下なので飾山笠（飾り山）は建てないほうがいいと述べた。これはどういう意味だろうか。

幕末・明治初期の山笠は柱に飾り物をたくさん取り付け、高さは一六メートルにもおよんでいた。しかし明治時代には各種電線が博多中に張り巡らされ、増えていった。これを切断しないように明治三一（一八九八）年からは山笠の柱を外して少数の飾り物を山笠台に直接載せるよ

うになり、そのため高さは五メートルにも満たないものになった。この低い山笠は「昇き山」と呼ばれ、今日に至るまで山昇きに使われている。

一方、明治三〇（一八九七）年と四三（一九一〇）年には福岡警察署が山昇きを禁じた。それぞれ出来たばかりの電燈線と市内路面電車架空線を保護するためである。そのため山笠当番町では前者の年には六町共同で櫛田神社境内に一本、後者の年には当番町ごとにその町内の街路に一本、柱の付いた従来の高い山笠を鑑賞用に据え置きにした。<sup>(36)</sup>これは「昇き山」と区別して「飾り山」または「据え山」と呼ばれるようになった。

大正時代になると高い飾り物と低い飾り物を用意して据え置き時と山昇き時で飾り物を交換したり（「釣り山」という）、高い飾り物の上部を横に開くように作って高さを調節したり（「開き山」という）するようになった。釣り山と開き山はいずれも昇き山と飾り山の特徴を兼ね合わせたものである。これをかりに「兼用山」と呼ぶことにする。<sup>(37)</sup>

しかし昭和六（一九三一）年からは、昇き山だけを建てる山笠当番町や、飾り山だけを建てる山昇きはおこなわない山笠当番町も出てきた。そのためこの年は、昇き山三本だけで追い山をおこなうという異常事態に陥った。この年から、祇園山笠の衰退が目に見えるものになった。

話を昭和一一（一九四三）年に戻す。加勢人の雇用費もかなりの額になるが、しかし豪奢な飾り物の必要な飾り山ないし兼用山を建てる費用もかかるうえに戦時下なのにいかにも贅沢をしているようにみえる。そこで川野は、昇き山を建てる追い山以下の山昇きはおこなっても、飾り山ないし兼用山は建てないほうがいい、と述べたのであろう。

六月一日、「山笠六当番町總代同道にて、「中略」市商工課と県物資課に行き、資材融通ヲ願出ル」。物資の不足とその供給の統制のため、山笠建設などに必要な資材が行政の協力なしでは集められなくなってい

表11 昭和18(1943)年の古溪町の台上がり

山昇きの種類	前	後
10日 流昇き	瀬戸健司・泉省太郎・西頭光治	岡本允志・島田次平・柴田邦夫
11日 朝山	西頭昭三・西頭長右衛門・泉宏治	柴田陸夫・川野又助・吉積健一
〃 他流昇き①	瀬戸雄三・今泉十郎・泉恒次郎	水浦良樹・山浦伊太郎・岡本晴弘
〃 他流昇き②	島田次平・泉次郎・西頭昭三	瀬戸寛二・尾崎幸祐・庄野俊雄
12日 追い山馴らし①	泉省太郎・尾崎幸祐・泉愛祐	泉次郎・吉積健二・柴田陸夫
〃 追い山馴らし②	吉積健一・今泉十郎	島田次平・幾度茂樹
13日 他流昇き①	岡本允志・泉次郎・西頭光次	内田繁樹・内田正男・泉宏治
〃 他流昇き②	瀬戸健司・西頭徳太郎・西頭幸一	吉積隆二・泉愛祐・山浦悌次郎
14日 流昇き	岡本晴弘・泉愛祐・内田繁樹	泉恒次郎・内田正男・新免伝三郎
15日 追い山①	泉次郎・川野又助・西頭幸一	島田次平・泉省太郎・今泉十郎
〃 追い山②	西頭長右衛門・尾崎幸祐	吉積健二・内田正男

「山笠準備控帳」(「西頭資料」15-1)より作成

※①②は、当該山昇きにおいて古溪町の人間が二回台上がりを勤め、かつその人員を替えることを意味する。

※典拠には、流昇きと朝山の順路は記されていない。両山昇きとも流内だけを巡行するものなので、今日と同様、通過町順にその町の人間が台上がりを勤める予定だったと思われる。町境から町境までが一区間なので、順路の区分を書く必要はなかったと考えられる。つまり古溪町の人間は、山笠が古溪町を通過するときのみ台上がりを勤める予定だったと思われる。

※他流昇きと追い山馴らしの順路は二分されて記されており、古溪町の人間以外は全く台上がりを勤めないことが示されている。

※追い山の順路については最初の区間と最後の区間のみが記されており、そこで古溪町の人間が台上がりを勤めることが示されている。その間の順路は数分割されたうえで、区間ごとに非番の各町の人間が台上がりを勤める予定だったと思われる。

※「西頭光治」は「西頭光次」の誤記で、昭三氏の弟。読みは「みつじ」。

た。現実問題として、飾り山や兼用山を建てることはほとんど不可能になっていた。

六月二八日、山笠建設の作業場を浄める「小屋入り」という儀礼がおこなわれた。山大工棟梁として島田次平の名が、日雇棟梁として島田伊平の名が出ている。

六月二十九日、「第一回、町家主へ寄附取り二行ク」。本町内家主のもと

へ寄附金を受け取りに行ったのである。無論、寄附金は積立金とは別である。第一回とあるので祇園山笠の開始直前と開催期間中に何回か集める予定だったはずであるが、二回目以降の記述はない。

七月に入ると、二日に山笠台の建前(棟上げの意)、三日に棒締め(山笠棒を山笠台に縛り付ける作業)をおこなった。さらに記述はないが、このあと附属品や飾り物の取り付けも当然おこなったはずである。そして七日に山笠建設は完了したとある。

七月一日、「町年寄協議者 泉栄次郎・西頭徳太郎・川野又助・西頭長右衛門」が「台上市ノ話合」をした(表11)。山笠建設委員が町年寄とも呼ばれていたことがわかる。また彼らが町内の台上がりの人員の決定権をもっていたこともわかる。

台上がりとは、山笠きの指揮を執るために山笠台の前部(前または表という)と後部(後または見送りという)に三人ずつ、ときには二人ずつが乗ることをいう。さらに乗っている人物を指すこともある。台上がりは山笠きの速さと安全にもっとも強く影響を与える役割であるため責任重大であり、それゆえにまた名誉とされる役割でもある。とりわけ追い山のさいの台上がりは非常な名誉とされている。<sup>38)</sup>この決定にさいして「町年寄ニテ話合シタル事ハ異存ヲ申立ヌ事」も確認された。台上がりにたいする各山昇き参加者の執着が強く、不満が生じやすかったことを配慮したのである。

表11の台上がりの姓名を仔細にみると、昭和一六(一九四一)年一月の「改正別途積立金」や昭和一五(一九四〇)年後半の常会における表店世帯主の出席者一覧に出てきた姓名ないし姓ばかりで、やはり表店世帯主ないしその子弟がこの役割を占めている。

唯一の例外にみえるのは新免伝三郎であるが、彼は今泉十郎の親族で、当時は今泉の家に下宿していた人物である(内田恵太氏談)。表店世帯主の子弟に準じた扱いを受けたといえる。

以上から、山笠役員だけでなく台上がりも表店居住者によって占められていたことが確認できる。

七月一日、古溪町と受取町の万行寺前町との間で話し合いがもたれ、山笠台とその附属品を二五〇円で譲渡することが決まった。

七月一日、追い山終了後、山笠台などを万行寺前町に引き渡し、後始末をして西公園（旧福岡部にあり）の荒津亭で町内の打ち上げをした。

翌一六日には「宮地嶽神社へ若手組方御礼参り二行キ、中年組・年寄等大宰府二御礼ニ参拝」した。ここでの年寄とは老人組の意で、宮地嶽神社とは福岡県宗像郡津屋崎町にあるもの、大宰府とは大宰府天満宮のことである。

## 二節 山笠本当番費用の収支

実際に昭和一八（一九四三）年の山笠本当番にどの程度の費用がかかったのかは、「昭和十七年 山笠諸入費控帳 五番山笠当番 古溪町」に記されている。これは山笠本当番前年から本当番年にかけてのきわめて詳細な支出記録である。末尾には、簡潔に要約された支出金のほか、大雑把にまとめられた収入金も記されている。その末尾のみを左に引用する。

支 出 部	
一、金貳千五百三十七円〇四銭	五番山笠ノ入費總メ
一、〃五百三拾九円也	慰勞費總メ
メ 合計 三千七拾六円〇四銭	
外二 三百十八円七十四銭也	昭和十七年支出總メ
總計 三千三百九十四円七十八銭也	
収 入 金	

一、老千七百八十式円七十銭 電燈料戻り金及ビ山笠稚児積立金メ

昭和十八年六月三十日迄の分

一、老千十式円也 寄附金總メ

一、五百三十三円三十銭 補助金メ

一、貳百五十円也 山笠 万行寺前町売却金

一、老百八十四円五十銭 山笠小道具<sup>切代</sup>売却メ

メ 三千七百六十式円五十銭也 町内ヨリ受取手拭染代メ

### 差引残金計

一、金 三百六十七円七十四銭也

右町総代へ相渡ス

昭和十八年八月十六日

まず「支出部」について、末尾に先立つ記述も交えながら説明する。「五番山笠ノ入費總メ」は昭和一八（一九四三）年の一月から祇園山笠終了時までの支出金である。「慰勞費總メ」は祇園山笠終了直後になされた打ち上げと御礼参りに要した支出金である。また、昭和一七（一九四二）年に支出された山笠本当番関係の金は六月と七月のみに存在しており、よって「昭和十七年支出總メ」とはこの両月分の支出金を指している。

次に「収入金」の各費目について説明する。

電燈料戻り金（電燈料割戻金に同じ）と山笠・稚児積立金は合わせて一七八二円七二銭とあるが、しかし残念なことに戻り金と積立金がそれぞれいくらだったのかは書かれていない。<sup>(40)</sup>

寄附金についても誰がいくら寄附したのか、具体的には確認できない。本町内家主から寄附金を得ていたことは前述のとおりであるが、ほかに

も寄附金を出した人間はいたかもしれない。

補助金の合計は五三三円三〇銭である。明記されていないが、この内訳は櫛田神社から一三三円三〇銭、福岡市から三〇〇円、博多商工会議所から一〇〇円である。それぞれ同額の補助金が各山笠当番町に交付されたはずである。

補助金についてはその背景を説明しておきたい。日露戦争後の日本の好況は短期間しか続かず、とりわけ明治四〇（一九〇七）年に恐慌が起こると慢性的な不況に転じた。政府が各種の増税などをおこなっても財政状況は依然厳しく、その回復には第一次世界大戦（一九一四―一九一八）による、いわゆる大戦景気を持たねばならなかった。しかしその後、大正九（一九二〇）年の戦後恐慌を始めとしてたびたび恐慌が起こり、再び慢性的な不況が続いた。昭和四（一九二九）年にはニューヨークはウォール街での株価の暴落をきっかけに世界恐慌が起こり、日本の不況はさらに激しくなった。

博多でも明治末期から困窮者が増えて山笠当番費用が集まりづらくなり、山笠当番の経営に困難を来した。<sup>(41)</sup> 大正時代にはそれでも小康を保っていたが、昭和六（一九三一）年以降は末期的な症状を呈した。昭和八、九（一九三三、四）年のときは、流昇きをおこなった流はあったが追い山は中止されてしまった。そのあと数年間も追い山に参加する山笠は少なかった。また、飾り山どころかいかなる形式の山笠も建てない当番町さえあった。加勢人雇用費も山笠建設費（飾り物の製作費と山笠自体の組み立て費）も、ますます工面が困難になっていった。祇園山笠にたいする補助金の交付は、不況による町々の経済力の低下という事態を受けて始まった。

櫛田神社から各山笠当番町にたいする補助金の交付は大正一五（一九二六）年に始まった。同年五月の博多財産区の解散にともない、同財産区ではその資産の一部の二万円を櫛田神社に寄附し、同社では「其利子

金ノ内ヨリ未来永遠毎年金八百円也ヲ六当番町へ山笠建設補助費トシテ交付」<sup>(43)</sup> することにした。六当番町にたいして合わせて八〇〇円、すなわち各当番町には一三三円三三銭の交付となるが、端数が出るので実際の交付額は毎年微妙に変わり、昭和一八（一九四三）年には一三三円三〇銭ずつが交付された。<sup>(44)</sup>

昭和一二（一九三七）年になると、<sup>(45)</sup> 同年の西町流山笠当番釜屋町の前町総代柴藤柳多が祇園山笠の衰退に危機感を募らせ、猛運動を展開した。彼はまず旧博多部選出の福岡市会議員たちを説得し、その結果、三月二五日の市会で満場一致で山笠建設補助金交付が決議された。福岡市から毎年一八〇〇円の補助金が山笠当番町に交付（一当番に三〇〇円）されることになったのである。ついで彼は博多商工会議所にたいし、

山笠ハ観光及産業奨励、大都市繁栄増長ニ重大ナル意義ト関聯アルヲ力説シ、ソノ援助方ヲ申請シタル処、「中略」金六百円也ヲ六当番二（一当番壹百円宛）補助交付

されることが決まった。さらに彼は、櫛田神社からの補助金が有名無実と化している現状（同社から受領した補助金を、山笠当番町が同社の修繕費や同社への奉納金として返却するのが慣例となっていた）を批判し、この補助金は当番町が山笠建設のために当然使うべきことを六当番町へ説いた。そして彼は櫛田神社と「数度交渉ノ末、今後ハ一番山笠当番ガ交付金八百円ヲ受取り各六当番ヘ交付スル事」を再確認した。

昇き山の登場で山昇きのさいに山笠が各種電線を切断する虞はほとんどなくなり、また祇園山笠の衰退は著しくなっていた。そこで福岡市の観光材として祇園山笠を盛り立てようとの意図で、福岡市と地元財界は山笠建設に補助金を交付することにしたといえる。<sup>(46)</sup>

これで山笠当番費用にいくらか余裕ができたため、この年の祇園山笠

では石堂町流の当番町のみは飾り山を建てたが、残る五当番町では「飾付昇山」すなわち兼用山を建てて数年ぶりに本格的な追い山をおこなった。以後、昭和一九（一九四四）年まで、右の三種の補助金がそれぞれ交付された。<sup>(47)</sup>

しかしながら補助金の交付が始まったのも束の間、日中戦争とそれに続く太平洋戦争によって男手は不足し、国民は耐乏生活を強いられ、祭礼に多額の金をかけることもできなくなっていった。奉納神事ということで昭和一九（一九四四）年までは細々と祇園山笠は継続されたが、昭和二〇（一九四五）年六月一九日の空襲でついに中断となり、復興したのは昭和二四（一九四九）年のことであった。

話を昭和一八（一九四三）年に戻し、「収入金」の残りの費目をみていく。古溪町は追い山終了後、万行寺前町へ山笠台とその附属品（両者合わせて、たんに「山笠」とある）を二五〇円で売却した。

一方、山笠小道具類を切り売りした収益と、町内の男性に配られた祇園山笠用の手拭の染め代（町内の男性が支払った）とを合わせた額は一八四円五〇銭となっている。後者は、自町の一般山笠き参加者用（つまり非山笠役員用）の手拭である。<sup>(48)</sup>

人形を始めとする山笠の飾り物は祇園山笠終了後、北部九州の他の祭礼で出される山笠の飾り物に転用するためその関係者に売却されたり〔福岡 一九八九〕、縁起物として博多の商家などに売却されたりする慣例がある。山笠小道具類の売却というのはこの慣例を指す。また、祇園山笠では手拭を重要な携行品とする傾向が遅くとも幕末にはみられ、今日に至るまで意匠を凝らした各種の手拭が毎年新調されている。

## 8 要約

本稿の目的は、近代の博多においてある特定の町が総体としてどのよ

うな機能と構造をもち、どのように祇園山笠を経営していたか、という点を可能なかぎり詳細に提示することであり、それはすでに終えている。ここでは提示の中心であった昭和一〇年代の古溪町の様相を簡潔に要約し、結びとする。

昭和一〇年代の古溪町では地主であれ地借であれ店借であれ、表店に居住する世帯の主が山笠本当番費用（および稚児当番費用）を負担するとともに、山笠本当番運営をおこなっていた。彼らは二つの祭礼当番費用だけでなく、町費・税金・給水料・電燈料・衛生費といった、町にたいする各種の金銭負担も果たしていた。衛生費は昭和一三（一九三八）年五月から裏店の世帯主にも課せられるようになったが、しかし全体として、町にたいして金銭負担の義務を厳格に負っていたのが表店の世帯主だけであったというのは間違いない。

ようするに表店に居住できることが町にたいして金銭を負担できる証拠とみなされ、町にたいする責任を有するものとみなされた。町の正式な構成員は表店の世帯主だけであった。それゆえに彼らだけが町の寄合に出席し町役員やあるいは町内会・隣組の役員を選挙する権利を有していた。山笠役員や台上がりを勤められるのも彼らと彼らの子弟に限られていた。

周知のように江戸時代の都市では、営業活動ができるといふ理由で道路に面した表店の価値が高かった。博多も例外ではなかった。とくに一九世紀中期の片土居町では、地主・地借・店借の別なく表店居住の世帯主が山笠当番費用の負担と山笠当番運営への参加を平等に認められていた〔宇野 二〇〇五〕。古溪町では昭和一〇年代に至ってもなお、これと酷似した形で表店居住の優越が残っていたと結論できる。

この優越には開放性が伴っていた点は強調しておく必要がある。他町からの転入者でも自町の裏貸家からの転居者でも、ひとたび表店に入れば町の正式な構成員として認められたからである。町の正式な構成員を



表店世帯主とする以上、町の維持と運営のためにはその人数をできるだけ一定に保つ必要があったであろう。

原則的には準世帯は表店世帯より貧しく、転出入も容易であったと思われる。したがって町がその世帯主に金銭の負担を求めたり町の運営への参加を求めたりすることは、実際上難しかったと考えられる。

注目すべきは、表店での居住を重視する傾向は日中戦争開始以後の戦時体制の強化によってもさほど変化を来さなかった点である。国策を短期間に町内の全住民に浸透させて彼らを戦争遂行に積極的に動員させるため、町内会・隣組に裏店や借間の世帯主も組み込むという形で、古溪町では町内の全戸がひとまずは平等に組織化された。しかしこれは町の必要からそのようになったものではなく、内務省の指示という上からの改変であつたうえ、戦時体制への動員に直接かわらない場面では表店世帯と準世帯との間の平等を実現する必要性はなかった。

ところで、明治末期以降の日本では、一時的な好況はあつたとはいえ慢性的な不況が続いていた。博多においても山笠当番費用を集めることは徐々に困難になっていった。そのため博多の祭礼集団（七流とその構成町）では福岡市や博多商工会議所といった「外部」にも金銭を頼ることとで祇園山笠の維持を図っていかざるを得なくなった。戦後に顕著になる「福岡市民の祭り」への第一歩を踏み出したといえる。

しかし日中戦争・太平洋戦争の激化にともない、山笠当番費用はさらに不足し、物資も不足していった。山笠き参加者である男手も不足していった。このような状況のなかで古溪町は昭和十八（一九四三）年の山笠本当番を勤めなければならなかった。

そののち昭和二〇（一九四五）年六月一九日の空襲で旧博多部はその六割が焼失した。全焼した古溪町に至っては、焼け出された住民たちによつて町の維持は不可能と判断された。七月一二日には「空襲罹災二依り」「古溪町解散」が決議され、一五日には残っていた町費と支那事変

特別町費が処分され、町の活動に終止符が打たれたからである。<sup>(49)</sup>そして終戦後、古溪町は他の町々と同じく復興のための苦闘を始めることになった。

#### 註

- (1) 博多にはこのほか厨子町流（図師町流とも書く。近代には櫛田流と通称）と新町流（幕末に岡流と浜流に分離）、および明治後期の博多湾の埋立工事によつて誕生した築港流がある。土居町流・洲崎町流・石室町流・厨子町流については、「町」を省いて「土居流」のように書くことも多い。なお呉服町流は市小路町流ともいい、洲崎町流は須崎町流とも書く。
- (2) 魚町流は昭和三九（一九六四）年五月に能当番を櫛田神社に返上し、祇園山笠から完全に退いた。そのためこの年から櫛田神社が能を奉納するという、変則的な方式が続いている。
- (3) 福岡市総合図書館寄託資料。古溪町の西頭昭三氏（一九二八～二〇〇四）が同館に寄託したもの。この資料の概要と同氏については「福岡市総合図書館文書資料課編 二〇〇二・二七、二七」で説明されている。
- (4) 近代の博多の裏長屋については「福岡市教育委員会文化課編 一九九〇・六〇～六五、一九六〇～一九七」に具体例が紹介されている。
- (5) つまり博多部から計一〇一人の議員が選出されているので、町数が一〇〇から一〇一に増えていたことがわかる。しかしここでの増えた一町がどの町に当たったのかは確認できなかった。
- (6) 『石城志』では報光寺は藏本番（藏本町の前身）にあると記されているが「津田・津田 一九七七（一七六五） 卷之二、卷之五」、誤りである。報光寺は終戦直後の福岡市による区画整理で廃された。なお博多滞在中の古溪宗陳の動向については「伊藤 一九九八」に詳しい。
- (7) 一〇〇町から俳優街の寺中町と遊女街の柳町の二町を除いた九八町。この二町はどの流にも属していなかった。
- (8) 「地券臺誌」「西頭資料」二二。
- (9) 順に「西頭資料」五および六。資料名称はいずれも目録どおりであるが「福岡市総合図書館文書資料課編 二〇〇二・二八」、実際の資料にはいずれも「現在」ではなく「現住」と書かれている。
- (10) 明治九（一八七六）年、町名変更が実施された。まず「〇〇町上」は「上〇〇町」となり、中・下の町も同様となった。さらに「〇〇小路町」は「〇〇小路」と、「〇〇番」は「〇〇町」となった（落石 一九六一・二五四）。たとえ

ば「鯛町下」は「下鯛町」と、「対馬小路町下」は「下対馬小路」と、「奈良屋番」は「奈良屋町」と変わった。また金屋町横町は明治二四（一八九一）年に横町と改称された。

(11) この町は明治三五（一九〇二）年五月の成立。千年町とも書く。

(12) 「(仮) 古溪町関係書類」(「西頭資料」一九九)。

(13) 「(仮) 決算及び算用書」(「西頭資料」一〇〇)。

(14) 「山笠準備控帳」(「西頭資料」一五一一)の表紙見返しの貼付資料による。

(15) 「昭和拾年七月吉辰 町規約及び別途積立規約」(「西頭資料」一二二)中の「昭和拾五年十月十五日須賀神社御神幸」という記事の冒頭に「町総代 西頭徳太郎／取締役 川野吉平／全 西頭長右衛門」とある。しかしこの取締役は山笠取締役ではなく、祇園社の御神幸にたいする寄附金集めの取締役である。町内の特定の共同事業にかんして、必要におうじて取締役を設けていたようである。

(16) 「西頭資料」一二一。

(17) 松囃子は室町時代に京都から伝わった正月の奉祝儀礼で、祇園山笠とならぶ博多の二大祭礼である。藩政期には正月一五日におこなわれ、博多から福祿寿・恵比須(男女二柱)・大黒天の各仮装行列と稚児舞の二団を仕立てて福岡城で藩主を参賀したのち、福岡・博多で祝言を触れ歩いた。

福祿寿・恵比須・大黒天の仮装行列を運営するのは、毎年替わらずそれぞれ魚町流・石堂町流・洲崎町流であった。各流では一年交替の当番町制度が採られ、当番町が運営の中心となっていた。なお明治以降は、それぞれの運営する仮装行列にちなんでこの三流はそれぞれ福神流・恵比須流・大黒流と通称されている。一方、稚児舞の二団は東町流・呉服町流・西町流・土居町流が一年交替でこれを運営していた。各流では一回交代の当番町制度が採られ、当番町が運営の中心となっていた。このほか余興として、各当番町以外の町々は定まった形式をもたない練り物を数多く出した。これを「通り物」という(宇野 九九九)。

通り物は明治時代になると肥大し、「どんたく」と呼ばれるようになった。そして本来の松囃子である三福神の仮装行列と稚児舞はどんたくの一部のような形になった。また開催日程もしばしば変更された。大正四（一九二五）年からは四月三〇日と五月一日の二日間実施されるようになった。年によっては日程が少し変わったり中止されたりしたこともあったが、原則的にはこの日程で昭和一五（一九四〇）年まで実施された。日中戦争の長期化を受けてその翌年から中止され、昭和二一（一九四六）年五月二四日に博多復興祭の一環として復興された(井上 一九八四 一七六。福岡市民の祭り振興会編 一九九二)。

(18) 「西頭資料」九。

(19) 博多では、転入者が町にたいして納める挨拶の金を見知金という。戦後、この慣習は廃れた。

(20) 「西頭資料」一三三。

(21) この一覧の欄外には「下三・七〇 上六・四三 計一〇・一三」という後年の加筆がある。納税組合別に積立金を集めていたことが知られるとともに、転出入や空家への入居などが重なって一〇円丁度にはなくなっているが、一〇円を目安としていたことは窺える。

(22) 「西頭資料」一三三。

(23) 「西頭資料」一四〇。

(24) 副町総代という役職は「昭和拾年七月吉辰 町規約及び別途積立規約」(「西頭資料」一二二)にはみえない。昭和一〇（一九三五）年七月以降に設けられた役職であろうか。

(25) 金光教大浜小教会所は昭和二〇（一九四五）年六月一九日の空襲で焼失し、昭和三八（一九六三）年に大浜町四丁目に再建された。

(26) 「昭和十二年十月 支那事変特別町費」(「西頭資料」一三三)によれば、「岩城」は表店世帯主として他の二一人とともに特別町費を課せられている。

しかし「昭和拾年七月吉辰 町規約及び別途積立規約」(「西頭資料」一二二)中の記事では、「日切計算」にも「古溪町別途積立規約」にも「改正別途積立金」にも「岩城」という姓は全く出ていない。日切掛金も積立金も課せられていなかったのである。ところが「昭和拾五年十月十五日須賀神社御神幸」のみには、右の「岩城」と同一人物と思われる「岩城エイ」が祇園社の御神幸にたいする寄附者として他の二一人とともに姓名が出ている(表9を参照)。

さらに岩城エイは「昭和十九年四月 納税計算帳 古溪町」(「西頭資料」一八)によると、昭和一九（一九四四）年四月から翌年五月までは毎月分、日切掛金を納入している。そして昭和二〇（一九四五）年六月一九日の空襲のあとには「市内吉塚駅前 信義館内」に身を寄せていると記されている。

町にたいする彼女の金銭負担のあり方は奇妙である。ここでの臨時常会にも、たまたま欠席したただけなのか、選挙権がなかったのか、ともかく出席していない。

(27) 原文の年月日は「昭和十五年二月十四日」となっているが、書き誤りである。この直前の常会は昭和二六（一九四二）年一月一五日に開催されており、「昭和一五年度決算報告」などがなされたと記されているからである。

(28) 「昭和十七年 山笠諸入費控帳 五番山笠当番 古溪町」(「西頭資料」一六一)。

(29) 遠城は詳しい時期は不明としながらも、近代に西町流に来ていた加勢町とし

て岡流の祇園町(上下の別は不明)と櫛田流の今熊町を挙げている(遠城 一九九二 三七)。「西町流山笠棒調製記録并ニ受授手続申合規則 続」(櫛田神社文書)一〇三九(二)によると、祇園町は大正一四(一九二五)年から西町流に加勢に來たが、西町流では昭和二(一九二七)年七月一二日にこれを断ることを決議した。すると、ここでたんに「加勢町」と記されているのは今熊町のことなのだろうか。聞き取り調査では確認が取れなかった。加勢町が来ていること自体をどなたも記憶していなかった。

なお、本稿で言及する「櫛田神社文書」と「櫛田神社文書(2)」はすべて福岡市総合図書館蔵のマイクロフィルム版である。

(30) 「昭和十七年 山笠諸人費控帳 五番山笠当番 古溪町」(「西頭資料」一六一一)。

(31) 山笠当番の催合において、本当番と半当番の關係がすべてこのようなものだったわけではない。たとえば藩政期の奈良屋番と奥小路町では、奈良屋番が常に本当番を勤めて奥小路町はこれに従属する形であった(博多山笠行事記録作成委員会編 一九七五 五一―五二)。

(32) 「西頭資料」一五一。

(33) 「昭和十九年四月 納税計算帳 古溪町」(「西頭資料」一八)。

(34) 「西町流山笠棒調製記録并ニ受授手続申合規則」(「櫛田神社文書」一〇三九一)。

(35) 表10に出ている人物のうち四人については生年月日が知られている。左に記しておく(博多山笠行事記録作成委員会編 一九七五 二四)。

西頭長右衛門 明治三二(一八九九)年一月三〇日

吉積健二 明治三四(一九〇二)年九月一〇日

泉省太郎 明治三七(一九〇四)年一月一五日

泉 次郎 明治三八(一九〇五)年八月一七日

生年からみて昭和一八(一九四三)年にはいずれも中年組に属していたと思われる、山笠本当番運営に必要な経験を充分有していたと考えられる。

(36) 明治四三(一九一〇)年の場合、石堂町流は能奉納担当、魚町流は祇園山笠に不参加だったので、建てられた山笠は計五本となった。

(37) 近代における山笠の形態の変化については、町々の経済力の低下と合わせて別稿で詳しく検討する予定である。

(38) 山笠には速さが必要とされるので、安全面と体力面から若者組または中年組の人間が台上がりを勤めるのが普通である。ただし朝山では長老格の人間が台上がりを勤めるのが慣例で、このとき当番町では子供の成長と健康を願って子供を台上がりに加えることもある。そのため朝山の速さはやや遅い。

(39) 「西頭資料」一六一。

(40) 余談だが、昭和一四(一九三九)年の六番山笠当番妙楽寺町(洲崎町流)が作成した「山笠決算報告書(十二月現在)」(福岡市博物館蔵、「石橋源一郎資料(追加分)」二〇一二)には、山笠積立金が一〇一円二七銭、電燈料戻り金が一〇二円九六銭とあり、さらに後者については「十四年一月ヨリ十二月マデ」の分と註記されている。妙楽寺町では、電燈料戻り金については山笠当番年の分のみを山笠当番費用に加えたのである。昭和一八(一九四三)年に山笠本当番を勤めた古溪町が八年間にわたって電燈料戻り金を積立金に加えていたのは、利用の仕方がずいぶん異なっている。

(41) たとえば「西町流山笠棒調製記録并ニ受授手続申合規則 続」(「櫛田神社文書」一〇三九(二))によると、大正四(一九一五)年三月に開かれた西町流各町総代の会合の結果、同年の祇園山笠より非番の各町は当番町に五〇円ずつ山笠建設費を渡すことが決まった(古溪町と芥屋町は合同で五〇円を渡す)。当番町はこれに一〇〇円を加えて山笠を建設し、その他の諸費用は当番町がその全額を負担することも決まった。当番町だけでは当番費用を集めることが困難になっていたことが窺える。しかしこのやり方は当番年に他町から援助金をもらい、非番年には数年続けて当番町に援助金を渡すというもので、長い目でみれば損もないかわりに得もない。そこで「西町流共同山笠積金領収簿」(「櫛田神社文書」一〇五〇―一)をみると、大正一三(一九二四)年一月の西町流各町総代の新年宴会の席で、当年よりこれを廃止することが決まったと記されている。明記されていないが、右の理由により廃止されることになったのではないだろうか。

(42) 博多財産区とは、文政一三(一八三〇)年に櫛田神社へ寄附された備荒貯蓄米に始まる備荒貯蓄制度が市政施行にともない博多財産区と称されるようになったもの。福岡市参事会の管理下に置かれ、実際の運営には選挙で選ばれた財産区議員が当たり、寄附金とその利子で運営された。大正時代に入って福岡市の緊急救済策などが整備されたのにもない次第に利用されなくなり、大正一五(一九二〇)年五月に資産を処分して解散した。

(43) 「西町流山笠棒調製記録并ニ受授手続申合規則 続」(「櫛田神社文書」一〇三九(二))。

(44) 「山笠決算報告書(十二月現在)」(福岡市博物館蔵、「石橋源一郎資料(追加分)」二〇一二)によると、昭和一四(一九三九)年には一三三円ずつが交付された。

(45) 以下、この年の話は「西町流山笠棒調製記録并ニ受授手続申合規則 続」(「櫛田神社文書」一〇三九(二))による。

(46) 落石栄吉は福岡市からの補助金は各当番町に五〇〇円、博多商工会議所からの補助金はその半額としているが〔落石 一九六一 三〇八〕、すでにみたところ、これは誤りである。

(47) 昭和二〇(一九四五)年は六月一九日の大空襲で祇園山笠の実施が不可能となり、補助金の交付もなされなかった。

(48) 「(仮) 領収証綴」〔西頭資料〕七四四によると、古溪町は大正一四(一九二五)年の山笠本当番のさい、西町流全町の山笠役員用の手拭を作り、さらに自町の一般山笠参加者用に七〇筋の手拭を作った。前者については町総代(一筋)・取締(三〇筋)・衛生(二三筋)ごとに異なる種類の手拭を作っている。

〔昭和十七年 山笠諸入費控帳 五番山笠当番 古溪町〕〔西頭資料〕一六一一の支出細目によると、昭和一八(一九四三)年の山笠本当番のさいには、「流手拭染代」として二〇円が、「手拭染代」として五円が支出されている(布代については書かれていない)。前者が流内全町の山笠役員用の手拭で、後者が自町の一般山笠参加者用の手拭であろう。今日と同様、役員用の手拭いのほうが凝った染め方をしていて高価だったと考えられる。

以上から、大正期と昭和前期の西町流では流内全町の山笠役員用の手拭は当番町(ないし本当番町)が作り、一般山笠参加者用の手拭は町ごとに作っていたらしいことが窺える。

ところで「西町流役員名簿」〔櫛田神社文書(2) 八五五〕によると、昭和一八(一九四三)年七月に万行寺前町が古溪町にたいして山笠役員用の手拭の代金の全額(布代・染め代込み)として四九円一〇銭を支払っている。しかしこの費目は「収入金」には記されていない。書き漏らされてしまったとも、あるいはたとえば山笠台とその附属品の代金二五〇円のなかに含まれていたとも考えられるが、はっきりしない。いずれにせよ、この支払いにもやはり受取町が次の年にきちんと当番を勤められるだけの費用を準備しているかどうかを確認する意味合いがあったと思われる。

(49) 〔昭和十九年四月 納税計算帳 古溪町〕〔西頭資料〕一八。

#### 引用および参考文献

※丸括弧内に記した年は、その文献の成稿年もしくは初版発行年である。

伊藤幸司 一九九八 『古溪宗陳と天正期の博多』『博多研究会誌』六  
井上精三 一九八四 『どんたく・山笠・放生会』葦書房

井上精三 一九八七 『博多郷土史事典』葦書房

今泉健三編 一九一九 『福岡市商工人名録(初版)』博多商業会議所

宇野功一 一九九八 『都市祭礼の起源説話の生成と祭礼の「不変性」の確立——幕末以降の博多祇園山笠における革新と伝統——』『西日本宗教雑誌』二〇

宇野功一 一九九八 『近世博多松離子における儀礼の政治性』『日本民俗学』二二九

宇野功一 二〇〇五 『近世博多祇園山笠における当番町制度と当番費用徴収法』

『国立歴史民俗博物館研究報告』一二二

岡本佐一郎 一九二四 『福岡市々民録』福岡市住宅調査会

落石栄吉 一九六一 『博多祇園山笠史談』博多祇園山笠振興会

遠城明雄 一九九二 『都市空間における「共同性」とその変容——一九一〇—一九三〇年代の福岡市博多部——』『人文地理』四四—三

竹内理三他編 一九九一 『角川日本地名大辞典 第四〇巻 福岡県』角川書店

武野要子 二〇〇四 『博多八丁兵衛について——故・西頭昭三氏の死を悼む——』

『海路』一

津田元順・津田元貫 一九七七(二七六五) 『石城志』九州公論社

長田義彦編 一九二二 『福岡市商工人名録 第二版』博多商業会議所

長田義彦編 一九二四 『福岡市商工人名録 第三版』博多商業会議所

長田義彦編 一九二七 『福岡市商工人名録 第四版』博多商業会議所

長田義彦編 一九三二 『福岡市商工人名録 第六版』博多商業会議所

長田義彦編 一九三五 『福岡市商工人名録 第七版』博多商業会議所

博多山笠行事記録作成委員会編 一九七五 『博多山笠記録』博多祇園山笠振興会

福岡市教育委員会文化課編 一九九〇 『福岡市の町家』福岡市教育委員会文化課

福岡市総合図書館文書資料課編 二〇〇二 『平成一三年度 古文書資料目録 七』

福岡市総合図書館文書資料課

福岡市民の祭り振興会編 一九九二 『博多どんたく読本』福岡市民の祭り振興会

福岡市役所編 一九九一 『福岡市誌 全』積善館

福岡市役所編(推定) 一九二九(推定) 『昭和四年四月選挙 福岡市会議員選挙

人名簿抄本』福岡市役所(推定)

福岡市役所編 一九五九 『福岡市史 第一巻 明治編』福岡市役所

福岡市役所編 一九六五 『福岡市史 第三巻 昭和編前編(上)』福岡市役所

福岡市役所編 一九八九 『博多祇園山笠とその周辺』『民具マンスリー』二二—四

三原恕平編 一九八〇(二八八〇) 『筑前国福岡区地誌』文献出版

山崎藤四郎編 一九七三(二八九〇) 『石城遺聞(上・下巻合本)』名著出版

吉富増太郎編 一九四〇 『福岡市商工人名録 第九版』博多商工会議所

付記

本稿は、財団法人日本科学協会による平成一六年度笹川科学研究助成による研究成果である。記して感謝する。

本稿は古溪町関係者の皆様の御協力によって成ったものである。本文で御氏名を挙げた柴田睦夫氏・柴田邦夫氏・泉宏治氏・内田恵太氏・吉積久幸氏・青柳曙設伸氏・西頭敬一郎氏はもとより、多くの方々から御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。

(国立歴史民俗博物館科学研究費支援研究員)

(二〇〇五年五月一七日受理、二〇〇五年七月一五日審査終了)

## The Social Structure and the *Gion-Yamakasa* Management of a *Chou* in Hakata During the Modern Period : The Case of Kokei-machi

UNO Kouiti

This paper describes in detail the social structure of Kokei-machi, one of the *chou* allowed to participate in the *Gion-Yamakasa* festival in Hakata during the Modern period, and its management of the festival. Due to the existence of an abundance of historical materials dating from 1935 to 1945, the primary focus of this paper is on this period.

There existed huge social disparity in Kokei-machi between the households that lived on the *omote-dana* facing the roads and the quasi-households that lived elsewhere, that is, on the *ura-dana* or in rented accommodations. Only *omote-dana* households were able to take part in *chou* meetings and in the election of *chou* officials. Also, it was only the *omote-dana* households that paid charges, such as *chou* rates, charges for putting on festivals and sanitation charges. They alone were regarded as official members of the *chou*.

In 1940, during the prolongation of the Sino-Japanese War, *chou-nai-kai* and *tonari-gumi* were established in Kokei-machi. At that time, quasi-households were added to both organizations in accordance with the policy of the Interior Ministry. However, with heads of quasi-households unable to participate in the election of officials for both organizations, the dominance of the *omote-dana* remained intact.

The dominance of the *omote-dana* was clearly illustrated when, in 1943, Kokei-machi took on the role of being responsible for the *yamakasa* for the *Gion-Yamakasa* festival. *Chou* members involved in organizing the festival that year were either *omote-dana* household heads or their sons. Moreover, those who assumed the role of *dai-agari*, considered the highest honor in the festival, were also either only *omote-dana* household heads or their sons.

The staging of the *Gion-Yamakasa* had become difficult due to the continuation of a chronic depression in Japan that had begun at the end of the Meiji period (1868–1912), causing a decline in the economic strength of *chou* in Hakata as in the rest of the country. By the early Shouwa period (1926–1945), the *chou* of Hakata had got Fukuoka City and local financial circles to offer grants for the *Gion-Yamakasa*. However, the escalation of the Pacific War caused a shortage in both commodities and manpower, making the holding of the *Gion-Yamakasa* even more difficult. It was at such a time that it became the turn of Kokei-machi to take charge of the *yamakasa*.

---